

# HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Suruga-ku Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan

inside NEWS



## ●CONTENTS●

平成20年度入学式 .....	1	平成20年度科学研究費補助金採択状況 .....	19
平成19年度卒業式 .....	6	外部資金受入状況 .....	21
薬学講座 .....	9	教員人事 .....	21
コメの消費拡大キャンペーン .....	10	客員教授の紹介 .....	21
犯罪被害者の支援に尽力 .....	10	受賞 .....	22
「ようこそ先輩」を開催 .....	11	図書館だより .....	23
はばたき寄金からのお知らせ .....	11	はばたきアンケート .....	25
国際交流 カンザス大学薬学部を訪問して .....	12	開学記念行事 .....	27
静岡健康科学英語研修プログラム .....	13	健康支援センターからのお知らせ .....	29
フィリピン大学留学体験記 .....	17	HPリニューアル告知 .....	29
教員の著書紹介 .....	18	寄稿募集 .....	29
研究助成採択 .....	19		

平成20年度

## 静岡県立大学学部・短期大学部、大学院入学式

平成20年4月4日、静岡市駿河区池田のグランシップ大ホールにおいて、静岡県立大学学部・短期大学部及び大学院合同の入学式が行われました。式典には、石川嘉延県知事、吉川雄二県議会副議長をはじめ、多数の御来賓に出席していただき、学部・短期大学部及び大学院を合わせて1,040名の新入生及

び保護者の方々に西垣克学長が入学式式辞を、静岡県公立大学法人を代表し鈴木雅近理事長があいさつを述べました。また、新入生を代表して、経営情報学部の清水善貴さんが誓いのことばを述べました。



### 入学式式辞

静岡県立大学 学長 西垣 克

全国一早く開花し、満開をむかえた静岡の桜に見守られて、本日ここに平成20年度静岡県立大学 学部、短期大学部、ならびに大学院の入学式を挙行するにあたり、学長として式辞を述べさせていただきます。

日夜勉学に努力され、晴れて本学に入学された皆さん方に対し、心からのお慶びを申し上げるとともに、本日から一緒に勉学する新しい仲間として、皆さん方を県立大学のすべての構成員を代表して熱烈歓迎いたします。

入学生 of 皆さん方を、今日まで暖かく見守りさまざまな支援やはげましを贈っていただいた、ご家族の皆様方のお喜びもさぞかしであろうと拝察申し上げます。これからは、従前以上のご配慮をお願いできればお願い申し上げます。

皆さん方と同じように、県立大学も多くの人々に支えられて運営されております。特に昨年の4月1

日に公立法人として独立した経営形態に移行し、以前にもまして大学としての自覚自立を深く認識して、広く県民の皆さん方の信頼を



得ながら、その役割を果たすべく努力を続けているところであります。大学を日ごろ支援していただいている方々も、年度初めの大変ご多用なところを本日の入学式にご臨席頂きました。大学の設置母体であります、静岡県の石川嘉延知事をはじめとして、12名の県会議員の皆様と、吉川雄二県議会副議長、県内の大学として多くの連携事業を行っている国立

静岡大学 興学長、静岡福祉大学 加藤学長、学生の教育や実習に多大なご理解と配慮をいただいております、県立静岡がんセンター山口総長、県立総合病院 神原院長、産学連携推進事業や学生の奨学金などで大変お世話をいただいております、株式会社TOKAI 藤原代表取締役会長をはじめとして、多くのご来賓の皆様方にはご出席いただきましたことに対し心から厚く御礼申し上げます。



本年度の入学に際しましては、昨年より10%も多くの受験生に応募いただき、ここに入学された皆さん方は高い勉学に対する能力と志を持ち合わせている方々と確信しております。県立大学としては大いに誇りに思うと同時に、いかなる社会環境においても存在価値の高い大学をめざす上でも心強い限りであります。

大学をとりまく社会環境も、少子高齢社会の進展に伴い様々な変化を生じさせてきています。社会保障制度は崩壊の危機に瀕しており、教育制度においても新たな社会対応を求められ、大学の存在価値は大きく揺らいできております。モラトリアムな若者に対して、旧態依然の知識を羅列するだけの教育体制はもはや過去のものとなり、新たな未知なる状況に対応できる人材を養成する教育システムへ変革することが求められているのです。

大学教育で修得する能力として、国際的な教養と独自の問題認識を育みその上で問題解決能力を有することであるとされています。今日の社会では、ローカルからグローバルまで見渡せる広い視野と思考の広がりをも身につける必要性が求められているのです。

また、皆さん方が有している個体ないしは、一人の人間としての相対性と絶対性を共存させたローインテリジェンスを磨いていくことが不可欠と考えられます。

大学に入学すれば、後は決められたカリキュラムをとってん式にこなしていけば、無事卒業という

時代ではなくなったのです。大学の評価は、真に能力の有る人材をいかに多く社会へ輩出させることが出来たかで決められる時代になってきたのです。

県立大学で最も重点をおいていることは、質の高い教育の提供と皆さん方が自学自習していけるような、良好な教育環境の整備であります。大学での学習は皆さん方が独自にカリキュラムを作成し、各自の人生設計図を完成させていくことで達成されると考えています。

この学習を進めていく上で重要なことは他者とのコミュニケーションを上手にとれるようにすることであると思います。学友や教員と家族や社会といった広がりを持つ交流が求められています。近年KY語なるものが流行していますが、ケイタイメール語という新しいジャンルかもしれませんが、言葉を理解し、正しく活用できることは知性をみがく上で最も基本的な事柄だと思います。大いに古典を読み、すぐれた美術品や芸術と対峙して、人格をみがいていっていただきたいと思います。

昨年から新たにキャリア支援センターを設置いたしました。ここは、決して就職支援活動を行うのではなく皆さん方の人生における能力開発をお手伝いするセンターとして位置づけられています。先月ここで、全国の大学からキャリア支援を行っている各大学の学生によるセミナーを開催いたしました。そこではっきりしたことは、県立大学の学生の皆さん方は、つつましく、自分の意見を的確に主張することが弱いということでした。この県大生の弱点を早急に克服する取り組みを実施する必要があります。



多様な人々と交流し意見交換ができるという能力は、生きていく上では必要なことと考えられます。仕事の関係から、多くの企業のトップの皆さん方とお目にかかる機会がありますが、そこでいつも指摘されることは、今の学生は集団生活が苦手で、先輩との交流や部活動などが不足しているのではないかということです。県立大学においても、年々残念な

ことに部活動は衰退してきており、全学的に取り組む大きな課題となっています。様々なことにチャレンジを試み、世間を広く渡っていけるような素養を身につける、キャンパスライフを目指していただき



たいと考えています。

全国の大学でこのグローバル社会で生きていくための新たな教育が教養として求められております。県立大学では体感する3次元的な教養教育の構築をめざしております。本年からは石川県知事が強く推進されておられる舞台芸術センターのお力を得て、人間としての自己表現力を身につける授業を開催いたします。姿勢や発声法からはじまり、舞台鑑賞までを統合的に組み込んだ内容となっております。

隣接する県立図書館とは経営ビジネス講座の開講や、県立美術館とは開催されていたガンダーラとバーミヤン遺跡展にあわせて、展示物の鑑賞を組み合わせた講義を実施いたしました。県立大学と専門学術機関が連携して、広く県民のみなさん方を利用できる文化学術活動を取り組んだ立体的な教養教育の試みを行っております。

県立大学はその設置目的を具現化するために、静岡県のすべての地域をキャンパスとして富士山頂の環境ゼミナールから駿河湾海底資源まで、近隣の大学や専門機関と連携して教育を展開する計画を進めています。入学された皆さんには是非、知的好奇心のアンテナをせいいっぱい広げて、のびやかに学習して行っていただきたいと思ひます。

最後に、これからの大学のありようないしは社会へ果たす役割について考えてみたいと思ひます。

近年、地球温暖化の影響が日常生活にも現れ、社会は大変な混乱に直面し、様々な点から格差社会の問題が取り上げられてきています。教育場面でも教育格差が論じられ、不登校や引きこもりの若者、将来への希望がもてない若者が増加しているといわれています。村上龍の小説で、「希望の国のエクソダス」という作品がありますが、その作品の中で登場

する学生に「日本は何でもあるけど、希望だけがない」と言わせしめています。これは小説家の鋭い洞察力からでた意見ですが、社会学の分野では社会から希望が失われていくのは先進国共通の現象といわれています。

社会心理学者のランドルフ・ネッセの希望論では、希望という感情的努力は報われる視通しがある時に生じ、絶望は努力してもしなくても同じで報われることが無いと判断されるときに生じると述べています。そこで、希望とは心が未来に向かい現在の行動とつながっている時に生じる感情と社会学者の山田昌弘は論じています。

しかし、哲学者のイバン・イリイチは「脱学校の社会」、「脱病院化社会」の作者ですが、イバン・イリイチの遺言という副題のついたケイリーによって編集された「生きる希望」という書物で、「未来などない、あるのは希望だけだ」と主張しています。人類が本来「善」として出発し制度化したものが、自立を欠いた依存へと転化し、墮落することが最悪であると論じています。

大学が再生していくには、単に職業を得るためだけの通路という役割ではなく、そこで学んだ人々が一生持ちつづけられる希望の火をともしせる、場所になることを目指すべきではないでしょうか。

大学は、人類を豊かにする知性と希望を持ち続けられる人々を輩出する組織でありたいと思ひます。本日本学に入学された新たな仲間の皆さん方とともに、県立大学は多様な希望を創造する場になることを願ひ式辞とさせていただきます。



## 理事長あいさつ

静岡県公立大学法人 理事長 鈴木 雅近

平成二十年度 静岡県立大学 学部、短期大学部及び大学院の入学式にあたり、県立大学を設置・運営します 静岡県公立大学法人を代表して、一言お祝いを申し上げます。

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。皆さんを様々な面で支援し、温かい愛情をもって支えてこられた御家族の皆様にも、心からお祝いを申し上げます。

また、本日は、石川嘉延 静岡県知事や吉川雄二 静岡県議会副議長をはじめ、多くの御来賓の皆様にご出席をいただき、厚く御礼を申し上げます。

静岡県立大学は、静岡県公立大学法人が設置運営する大学として昨年4月に新たにスタートし、法人の設立団体であります静岡県からの支援もいただきながら、公立大学として教育・研究活動を展開しています。

法人化に伴い、大学においても様々な改革に取り組んで参りました。国際共通語である英語能力の向上を目指して、言語コミュニケーション研究センターを設置し、皆さんが自主的に言語学習ができるような環境を整備したことを始め、先程学長の式辞の中にもありました、キャリア支援センターを設置し、就職支援に加え、「働き方」を含めた生き方全体を「キャリア」ととらえ、キャリアを主体的・自律的に選択・決定していく力を身につけるための取組みも行っております。

さらに、研究分野においては、昨年、文部科学省のグローバルCOEプログラムに採択されましたが、これは、県立大学の研究レベルが国内トップクラスであることの証明といえます。

また、短期大学部は、遊びを通じて病気の子供を支援する専門家の養成プログラムを、全国に先駆けて実施しています。

このように、県立大学は、新入生の皆さんの学習意欲に応える施設・設備と教育研究体制を備え、また、先進的な取組を行っています。法人としても、皆さん方の学習環境の一層の充実に今後とも努めて参ります。

入学した皆さんには、学業に励み、本学において専門的な知識や高度な技術を習得され豊かな人間性と幅広い教養を身につけていただくことを心から願うものです。

また、ゼミやサークル活動に参加することで、新



たな学びの場を見出し、生涯の友人を得ることもありましょう。自らの主体的な選択で、これからのキャンパスライフを充実したものにしていきたいと思えます。

静岡県立大学は、昭和六十二年に県立三大学を改組・統合して誕生し、二十年余が経過しました。この間多くの卒業生を社会に送り出し、各方面から高い評価を受けています。

本日入学される皆さんには、静岡県立大学の良き伝統を引き継ぎながら、この伝統にさらに光を添えてくださることを期待しております。

結びに、皆さんの大いなる健闘と御列席の皆様のご健勝を祈念申し上げまして、挨拶といたします。

## 誓いの言葉

新入生代表 経営情報学部 経営情報学科1年 清水 善貴

春の暖かい光が感じられるこのよき日に、私たちは憧れの静岡県立大学に入学することができました。本日は、私たち新入生のために、このような盛大な式を執り行っていたいただき、誠にありがとうございます。

また、ただ今は、鈴木理事長、西垣学長先生、石川静岡県知事、吉川静岡県議会副議長から温かく、心強い激励とお祝いのお言葉をいただき、新入生一同大変感激しております。心からお礼申し上げますとともに、今日の新たな気持ちをいつまでも忘れず、静岡県立大学生として常に志を高く持ち、勉学に勤しみたいと思います。

私は、将来は福祉に関わる仕事をしたいと思っています。福祉と一口に言いますが、私の場合は現場で働く側ではなく、それを運営しサポートしていく側でのことです。今、日本では少子高齢化が進み、子供や年配の方を支える世代の負担は増すばかりです。こうした世の中で、私でも何かしら力になれると思っています。今はまだ知識も力もないですが、静岡県立大学で過ごす四年間の中で、こういった形でこういった福祉サービスに自分はどうか関わっていけるのかを探し、学ぶことで将来働くであろう組織で役に立つための糧としていきたいと思っています。

さて、私が福祉に興味を持ち、関わりたいと思ったきっかけは、実は静岡県立大学のオープンキャンパスでした。その日、全体での説明の際、小山経営情報学部長の「今ある年金問題もこの学部の卒業生が二人もいれば起きなかった。」という言葉に衝撃を受けたからです。当時、集中的に報道されていた年金問題に対するその力強い言葉に、私も何かやりたい、それもこの静岡県立大学で、という思いが溢れてきました。ですから、今こうしてここに出席していることが嬉しく大変誇りに思っています。また、四年間という年月で、多くの人に出会うと思います。私は、一生付き合っていける同志や恩師に出会い、互いに高め合える存在になっていきたいです。

本日、入学を許可されました1,040名は、志す分野はそれぞれ違いますが、これからの社会の担い手となるため、自分を磨き、日々修養に励んでまいります。

私たちは、今日から大学生として新たなスタートをきります。今までとは学ぶ環境が変わり、不安なこともあります。大学生生活を実りあるものにする



ため、常に積極性を持ち、多くのことに果敢にチャレンジしていきたいと思っています。失敗を恐れず、多くの失敗から自分自身を鍛えていきたいです。そして将来、社会に貢献できる人に成長したいと思っています。

そのためにも、西垣学長先生を始め、諸先生方、諸先輩方の温かいアドバイス、厳しいご指導をお願いいたしますとともに、今日の決意を常に忘れず、日々精進して参りますことをここに誓います。

平成19年度

## 静岡県立大学学部・短期大学部卒業式、大学院学位記授与式

平成20年3月25日、静岡市駿河区池田のグランシップ大ホールにおいて、静岡県立大学の学部・短期大学部合同卒業式及び大学院学位記授与式が行われました。式典には、石川嘉延県知事、佐野康輔県議会議長をはじめ、多数の御来賓に出席していただき、学部・短期大学部及び大学院を合わせて883名の卒業生及び保護者の方々を前に西垣克学長が式辞を述べました。



### 卒業式・学位記授与式式辞

静岡県立大学 学長 西垣 克

本日の卒業式は、静岡県立大学が開学20周年という節目を経て、昨年4月に公立大学法人へとその設置形態が移行した、記念すべき最初の卒業式であります。この式典を開催するにあたり、学長として一言式辞を申し述べさせていただきます。

ただ今卒業証書をお渡しした学部と短期大学部の卒業生、ならびに大学院修了生の皆さんが、県立大学のキャンパスで日夜勉学に励んだ成果に対して、心からの賛辞を送るとともに、就学を達成されたことにお喜びを申し上げます。

卒業生を代表し、特に成績優秀者として表彰された皆さん方は、県立大学の模範であり、誇りとするものであります。

今日のこの良き日を皆さん方以上に心待ちにされ喜んでおられるのは、皆さん方を物心両面から支えていただいたご両親をはじめとするご家族の方々であろうと思います。心からお喜びを申し述べると同時にその後労苦に対して厚く御礼を申し上げます。

大学で皆さん方が勉学にいそしむことができたのは、御家族以外にも数多くの方々のご理解や、ご支援をいただいた結果であります。

本日の式典にも、年度末の大変ご多用中の処、数多くのご来賓の皆様方にご出席をいただき、卒業生、修了生の旅立ちを見守って頂きましたことに、まずもって御礼を申し上げます。

大学の設置母体である静岡県石川嘉延知事、県議

会からは20名という多くの県議会議員の皆様方と佐野康輔県議会議長、県内の大学として大学教育において様々な連携と交流を行って



います、国立静岡大学の興学長、静岡福祉大学加藤学長、学生の教育や実習ならびに研究面で大変お世話になっている、静岡県立がんセンター、山口総長をはじめ、数多くの御来賓の皆様方には本日の式典にご臨席頂きましたことに、あらためて厚く御礼申し上げます。

本日ご卒業された中には、既に社会で活躍されながら改めて勉学の志高く所定の課程を修了された方も数多くおいでになります。人生は生涯学習の積み重ねであり不断の自己研鑽が求められますが、いざ実行するには強い意志と努力が必要とされるものであります。大学から社会に旅経つ多くの卒業生にとっては、このような方々は貴重な先達となられる方々であります。

大学ももちろん社会に存在する組織ではありますが、その果たすべき役割から幾分社会とは離れた存



在であることも事実であろうと思います。今日の社会情勢では、大学の有する教育資源をはじめとする、様々な資源を幅広く社会で活用できるように、地域社会に対して開かれた大学としてのあり方が求められてきております。この役割を果たしていくには、卒業生の皆さん方が今後大学と社会との有効な橋渡しの役割を担っていただければと考えています。その上で、人生の中でまた学びなおす必要が生じた場合は、いつでもまた大学に戻ってきて、一緒に学問を探究していただきたいと考えております。卒業式はこの意味で、ご縁が無くなる場ではなく新たな次の段階への出発の場であろうと思います。皆さん方は国立大学において、社会で十分に活躍していただけるだけの能力を身につけて、新しい世界に挑戦し雄飛していただけるものと確信しております。

しかしながら今日の社会情勢は、命が軽んぜられ長寿社会として明るい未来を描くことも難しい時代となってきております。宇宙空間には希望という星が輝き始めましたが、足元の地球では環境破壊と日常化する温暖化現象が観察され、世界経済の発展はおろか新たな食糧危機も指摘され、21世紀も最初の10年はどうやら暗澹たる様相を呈しています。この



世紀は当初から心と精神の世紀といわれ、ノールウェーが生んだ20世紀最高の画家といわれるムンクの有名な「叫び」という絵画に代表される不安の時代であるとも言われています。

この不安を考えたときに、文化勲章を受章し近代的な文芸評論という新たなジャンルを切り開いた小林秀雄は、35歳のときに書いた「僕の学生時代」という表題の論評でこのように述べております。

時は昭和12年で、7月には中国で盧溝橋事件が起こり、日中戦争が勃発した大変きな臭いときの9月に書かれたものであります。「僕はただもう非常に辛く不安であった。だがその不安からは得をしたと思っている。学生時代の生活が今日の生活にどんなに深く影響しているかは、今日になってはじめて思い当たる処である。現代の学生は不安に苦しんでいるとよく言われるが、僕は自分が極めて不安だったせいか、現代の学生諸君を別にどうという風にも考えない。不安なら不安で、不安から得をする算段をしたらいいではないか。学生時代から安心を得ようなどと虫がよすぎるのである。」実に小林らしい言い回しだろうと思います。



人々の人生において、確信を持てるものよりは不安に駆られる物事が多いのが通常のように思えるのです。不安もその人の貴重な財産と言えそうで、その最も簡単な解消法がいじめであるとすれば、社会のありようが相当人間らしさからずれてきているのかもしれない。

昭和26年に49歳になり「政治と文学」をあらわしますが、その中で「空虚な精神が饒舌であり、勇気を欠くものが喧嘩を好むがごとく、自足する喜びを蔵しない思想は、相手の弱点や欠点に乗じて生きようとする。」と述べています。皆さん方が大学で学んだ事柄が、豊かな精神を醸成するものであって欲しいと考えています。この意味で、年月が着たから自動的に社会へ排出される人生ではなく、社会へ出



る覚悟を身につけて旅立っていただきたいのです。

皆さん方の御両親が最も恐れている不安は、大学は出たけれどいつニートになるかという事柄であろうと思います。皆さん方の人生は、決してドラマのように短くは無く、十分に長い時間で過ぎていくものと思います。一度だけ与えられた、絶対的なものでありかつ生きることに相当の忍耐も必要と考えられます。人生の設計施工は、皆さん方が発注者となるのです。「不平家とは、自分自身と決して折合わぬ人種をいうのである。不平家は、折合わぬのは、いつも他人であり環境であると信じている」と終戦直後に小林は喝破しています。

戦後の驚異的な経済発展により、物質的には豊かになったような風景がわれわれの日常生活の中にありますが、大学という器の中で目に留まる情景には、何か大切な事柄を惜しげもなく日々失っているような想念にとらわれています。そこで大学受験の頃に

は、毎年問題として出題されていた小林秀雄の評論を改めて読み直してみたのです。

学生の頃には、ご本人にも出題された解答が分からないという伝説がある難解とされた評論ですが、小林の読書法や江戸時代の最も聡明な国学者である本居宣長に傾注した論表を気に入っていることから、改めて読み直したのです。今まではあまり気に留めなかった事柄に、戦後の我が国の精神史に様々な論評を加えていたことが良く解りました。そこで論評された多くの事柄が、死後およそ25年の歳月を経て日常的にわれらが直面している現実となっていることに気付かされたのです。

未来を創造する特権は、若者に固有のものと考えられます。単純に社会に有為な人材としてだけ存在するのでなく、一個の人間としてそれぞれの人生を最も利己的にしたたかに、かつしなやかに送って頂きたいと切に希望するものであります。

大学のあり方も時代の変化とともに、大きく変わってまいりました。特に少子社会においては、学生をはじめ社会から積極的にその存在が評価され、選択される立場になり大学間の競争が激しくなりました。卒業された皆さん方に、卒業してよかったと評価される大学を目指して、これからも県立大学では教職員一丸となって改革を進めてきていく所存であります。県立大学が皆さん方にとって、いつの時代でも智慧のふるさととして存在するように、皆さん方とともに努力を積み重ねていくことをここにお約束して、本日の式辞とさせていただきます。



## 静岡県立大学薬学講座の開催

薬学部 助教 鈴木由美子



平成20年4月21日(月)に本学大講堂にて薬学講座が開催されました。「くすりの専門家を目指す君たちへのメッセージ」をテーマに、日本発の世界的新薬の生みの親である杉本八郎先生、竹中登一先生をお招きし、創薬・新薬開発に関するご講演を賜りました。薬学部の全学部生、薬学研究科の大学院生、教員が参加し、大講堂が満席となりました。

まず、アルツハイマー病治療薬“アリセプト”の発明者、杉本八郎先生（京都大学大学院薬学研究科教授）に「遙かなる創薬の夢を追って」と題してご講演いただきました。ユーモアを



豊かに交えた楽しいご講演で、アルツハイマー治療薬の作用機序や研究開発過程のお話に加え、先生のユニークなご経歴、創薬を始めたころの夢や、趣味に至るまでの幅広いお話をさせていただきました。御母堂の認知症をきっかけに“なんとかして認知症の薬を作りたい”との思いを抱き、その一念で研究開発に努力されたそうです。ご講演に続き学生達から“成功の秘訣は”“モチベーションを維持するために必要なものは”との質問がありました。前者の質問には“人より頑張ること、成功するまで止めないこと”そして後者の質問には“自分のためではなく、人のために頑張る方が頑張れる”と答えられたことが大変印象深いものでした。



次に、竹中登一先生（アステラス製薬株式会社 代表取締役会長、東京大学大学院薬学系研究科 特任教授）に「患者志向の創薬と経営」と題してご講演いただきました。竹中先生は前立腺肥大症の排尿障害改善薬“ハルナール”の発明者とともに会社の経営者でもあられます。“二つに分かれている道のうち、人があまり通っていない道を選んでいくことで、将来の大きな違いに結びついていく”まずこの哲学者ロバート・フロストの詩の一節が紹介されました。創薬も経営も人が通らない道に真理があり、その先に成功があるとのこと。泌尿器科の医師との会話から“患者さんの気持ちを考えた薬の開発が必要”と気付かされ、以

前失敗した研究を応用したことがハルナールの開発に結びついたそうです。創薬に至るお話の中から、先生のお人柄や考え方に接するよい機会となったと思います。会場からの“会社で活躍できるよう学生のうちからやっておくべきことは”との質問に対し、“セミナー等で質問すること”を挙げ、“成功する研究テーマを見極めるポイントは”という質問に対しては、大学院における研究と会社での研究とでは違うと前置きしたうえで、“学生のうちはどんなテーマでも失敗から学べる”とアドバイスしてくださいました。

薬学講座の講演後には、講師の先生方との交流会が催されました。先生ごとに別々の会場にて約1時間、それぞれ50名程の学生・院生が参加し、先生方との歓談の時を持ちました。講師の先生方と間近に接し、ざっくばらんにお話を伺うことができる良い機会となりました。学生側から積極的に多くの質問がされ、その一つ一つに先生方が真摯に、丁寧にお答えくださいました。

今回の薬学講座は、創薬の楽しさ、遣り甲斐、難しさを知るうえで大変有意義であり、創薬が夢のある研究課題・目標であることをもう一度新たに学ぶことができました。学生、大学院生達にも大変良い刺激となったことと思います。お二人の講師の先生方に改めて感謝する次第です。



## コメの消費拡大キャンペーン「今日も早起き、朝ごはん！」の食育に参加して

食品栄養科学部 栄養生命科学科 栄養教育学研究室 准教授 桑野稔子  
助教 井上広子



静岡産の食材を使用したおにぎり

すことを目的に、“簡単！おいしい朝ごはんの提案”を致しました。

“簡単！おいしい朝ごはんの提案”では、特に静岡の地場産品を使った創作おにぎりを紹介し、手軽に食べられる朝ごはんの提案を致しました。創作おにぎりは、静岡産のコメの食材を活かし、地産地消の考えに基づき食材を選択し、栄養バランスを考え、短時間で作れるように試作を重ねました。当日は、“サクラエビととろろ昆布のおにぎり”、“黒はんぺんライスサンド”、“椎茸ピザ”、“わさび漬けチーズおにぎり”の4種類の創作おにぎり（上写真）を提案しました。一般来場者にはおにぎりを主食にした簡単にできる朝ごはんメニューの提案と創作おにぎりのレシピを配布しました。この取組は、両日ともに大盛況であり、その様子がテレビ4社（SBSテレビ、テレビ静岡、静岡第一テレビ、朝日テレビ）で当日夕方放映され、翌朝の新聞4社（静岡新聞、中日新聞、日本経済新聞、読売新聞）に掲載される等、多数報道されました。

今回、静岡市農業振興課企画による食育の取組に参加させていただき、研究室の学生達は、学内だけでは経験できない貴重な体験をさせていただき、勉強になったと思います。また、楽しく取組むことができました。我々教員は、静岡県立大学の学生達の取組が微力ではありますが、地域に貢献できたことを嬉しく思っております。最後になりましたが、静岡市農業振興課の皆様、コメ消費拡大キャンペーンに参加された皆様方に感謝致します。



当日参加したメンバー

## 犯罪被害者の支援に尽力

～ 短期大学部看護学科永野ひろ子講師に感謝状 ～

短期大学部看護学科永野ひろ子講師に対し、NPO法人静岡犯罪被害者支援センター理事長から平成20年5月24日(土)、感謝状が贈呈されました。

犯罪被害者支援センターとは、犯罪等の被害者及びその家族・遺族に対して、悩みの解決や心のケアなどを行うとともに、被害に遭ったことによるストレスなどから失われてしまった「社会とのつながり」を取り戻すための支援活動を行っている団体です。

永野講師は、平成14年5月以来長年にわたり当支援センターの「犯罪被害者直接支援員（ボランティア）」として犯罪被害者に対する電話相談やカウンセリング、被害者等の身体、生命、安全のための危機介入支援、および被害者等に対する精神的負担の軽減、並びに法廷・傍聴付添い支援等に力を尽くしてきました。

この貢献に対し、この度感謝状が贈られました。

永野講師は、今後も継続して、これまで培ってきた知識、経験と専門性を活かし、被害者等の支援活動に当たっていききたいとのことです。



## 「ようこそ先輩」を開催

薬学部 教授 赤井周司

薬学部では、平成18年度の6年制薬学教育の発足時、創薬・育薬等の研究者や専門家育成の充実を図る4年制の薬科学科を新たに併設しました。入学試験は両学科一括で行い、3年次から4年次への進級時に学科選択する制度を取っています。現在、学生の創薬・育薬等に関する体系的な理解を進め、勉学意欲の高揚を図るべく様々な早期体験学習を実施していますが、「ようこそ先輩」はその一環の新企画です。様々な企業において、研究の第一線で活躍中の本学部卒業生に、研究の醍醐味を語って頂くものです。

第1回目は平成19年12月10日に薬学部棟講義室で開催し、竹入 章さん（中外製薬）と宮嶋啓介さん（大塚製薬）が、企業での薬理学研究と医薬品合成研究について紹介されました。



また、第2回目は平成20年2月18日、林 賢一さん（東レ）と多田明弘さん（ポーラ化成工業）が、研究の楽しさと難しさについて、ご自身が関わった新薬や化粧品の開発を例にお話されました（写真）。また、講演の後で、演者を囲んでざっくばらんに質問するコーナーを設けました。卒業研究の研究室選び、大学院への進学、博士号の必要性、英会話力、企業での男女格差、などに関する質問が学生から矢継ぎ早に出、先輩方はそれぞれの実情に基づき丁寧に回答されました。ちなみに、「企業では、県大出身者と旧帝大出身者に違いがありますか？」の質問に対し、「研究でいい成果を挙げることに出身大学は全く関係無い。個人のやる気と努力が一番大事である！」とのことでした。

授業や実習の後の自由参加にもかかわらず、学部1、2年生を中心に毎回100名近い学生が参加し、「企業の現場を知ることが出来、進路選択に大いに役立った」と大好評でした。

新年度以降もこの企画は続きます。色々な職場で活躍中の先輩に来学頂きます。

## 「はばたき寄金」からのお知らせ

はばたき寄金運営委員会

### 1 平成19年度はばたき寄金事業実績

#### (1) 奨学金の授与

モスクワ国立国際関係大学短期交換留学生の派遣学生1人と受入学生2人に奨学支援金を授与しました。

#### (2) 第10回学生スピーチコンテストの開催及び第11回学生文芸コンクール並びに創造力啓発コンテストの実施

開学記念日の平成19年4月20日に第10回学生スピーチコンテストを開催しました。また、第11回学生文芸コンクール及び創造力啓発コンテストの作品募集を行い（7月～10月）、剣祭初日の11月10日に入選者の表彰を行いました。

#### (3) はばたき賞の授与

大学院生活健康科学研究科博士後期課程2年の稲守朋子さんが、世界テコンドー選手権大会において、顕著な成績をおさめたため、その栄誉と他の学生の模範となり本学の名声を高めたことを称え、はばたき賞を授与しました。

### 2 平成19年度はばたき寄金収支結果

○収入計	10,843,926円	
内訳	2,942,617円	前年度繰越金
	7,893,340円	寄附金等（教職員、互助会、後援会等）
	7,969円	雑収入（預貯金利息）
○支出計	771,925円	
内訳	666,000円	報奨等
	100,000円	事業費助成（開学記念行事）
	5,925円	雑費（賞状用紙代等）
○差引残高	10,072,001円	平成20年度に繰越

## 国際交流

## Kansas大学薬学部を訪問して

薬学部 医療薬学大講座 薬物動態学分野 尾上 誠良、山田 静雄

去る3月28～29日にかけてKansas州Lawrenceを訪れ、本学グローバルCOEの国際評価委員であるKansas大学薬学部創薬分野 (Department of Medicinal Chemistry) Barbara N. Timmermann教授を訪問した。1865年に設置された同大学はLawrence中心部の小高い林の中に位置しており、約30,000人の学生に対して薬学を含む14学部で175分野のプログラムを提供している総合大学である。広大な敷地を誇る同大学には120ヶ国からの留学生が約2,000人在籍しており、国際色が豊かなことでもよく知られている。また、同大学には著名な日系薬剤学研究者である故Takeru Higuchi教授 (日本薬剤学会におけるタケル・アヤヒグチ賞でも知られる) が過去に在籍しており、1989年にはHiguchi Biosciences Centerが設立されて産学連携の柱の一つとなっている。Centerの設立には日系企業を含む多くの製薬企業が援助しており、今でも日本人研究者が多く訪れるようである。我々も同施設を見学する好機を得て、Higuchi教授の偉業を示す展示物を多く見ることが出来、大いに刺激された。同大学はバスケットボールが生み出された場所としても知られており、ちょうど全米大学バスケットボール大会において同校のJayhawk basketball teamが好調な成績をあげて、大学だけでなく町全体が興奮冷めやらぬといった状況であった。後日談：Jayhawkは我々の訪問の数日後に全米No. 1となった。

まず、到着後は同部門の教官達との挨拶から始まり、Kenneth L. Audus薬学部長ともお会いすることが出来た。その後、NIHから特別講師として招かれたKenner Rice博士によるレクチャー

“Corticotropin receptor antagonists and drugs and research tools”に参加し、レセプターリガンドの創製と薬理作用解析に関する研究紹介を受けた。構造活性相関の領域にとどまらず創薬科学全般を網

羅したRice博士の研究内容は大変興味深いものであったが、それと同様に強く印象的だったのはセミナー後、学生から積極的な質問であったことである。Timmermann教授から聞いたところ、演者に対して質問やコメントする積極的な姿勢も彼らの評価の対象となっているようである。

滞在中、今後の共同研究について話し合う十分な時間を確保することができ、我々に帯同した博士後期課程1年(現2年)三坂眞元君が英語で約

10分程度のプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションのタイトルは“New drug candidates for COPD: focus on VIP and its stabilized derivatives”であり、我々が既に検討したChronic Obstructive Pulmonary Disease (COPD) モデル動物の開発やその治療のためのペプチド性粉末吸入製剤の研究に関するものであった。COPDは2020年には第3位の死亡原因になると予想されており、その治療だけでなく予防方法の開発・提示は急務な課題の一つとなっている。Timmermann教授らが精査している植物エキスあるいは単離有効成分について、我々が有するCOPDモデルでの薬理効果ならびに血中動態を評価し、植物エキスの摂取によるCOPD改善の可能性を探ることが出来れば新しい治療の提示に寄与するものと期待する。

最後に同大学の各種研究施設や現在建設中のHigh throughput Screening (HTS) centerを見学させて頂き、ビジネスに直結したサイエンスのあり方を体験することが出来た。特にHTS centerでは、単なる試験受託ビジネスにとどまらず、物性を考慮して厳選された10万個の化合物ライブラリーも構築しており、製薬企業のパートナーとしてのビジネス展開を視野に入れている。カンサス大学薬学部は、全米約80薬系大学中、NIH研究費獲得率(2007)がトップ(以下、カリフォルニア大学、アリゾナ大学、ニューヨーク州立大学の順)というこ



Prof. Timmermannご夫妻と筆者ら



薬学部 創薬分野の研究センター

とで、Research activityが非常に高いことが伺える。2日間でKansas大学の基礎研究への取り組みからビジネスの機会構築まで幅広く体験し学ぶことができ非常に実りある訪問となり、このような好

機を得たことと、多大なhospitalityをもって我々を迎えてくれたTimmermann教授に感謝しつつ筆を置く。

## 静岡健康科学英語研修プログラム（海外短期英語研修）

# 第一回 Shizuoka Health Sciences English Programを実施して

グローバルCOE事業推進担当者 吉村 紀子（国際関係学部教授・言語コミュニケーション研究センター長）

静岡健康科学英語研修プログラム（Shizuoka Health Sciences English Program, SHEP）は、静岡県立大学が大学間協定を締結している米国・オハイオ州立大学（The Ohio State University, OSU）のAmerican Language Program (ALP) とInstitute for Japanese Studies (IJS) とのコラボレーションで静岡県立大学グローバルCOEのために独自に開発した海外短期英語研修プログラムです。SHEPの目標は、健康科学に関する特別な英語カリキュラム（English for Special Purpose）を通して、博士課程の大学院生と若手研究者の科学英語コミュニケーション能力の向上を図ることにあります。主な活動は、午前中は日常会話からディスカッション、研究プロジェクトプレゼンテーションまでを実践的に学習する授業、そして午後は研究室を訪問し、OSUの教員や大学院生たちと意見交換等を行う学術交流です。



第一回目のSHEPは、2007年12月に3週間実施しました。まず、OSUでの授業が円滑に進むように、9月から準備を始め

ました。例えば、参加希望者に対して1ヶ月間の集中TOEFL講座を開き、ネイティブ講師が指導しました。この試みは、受講生にとって2つの目的—(1)基礎的な英語知識の復習、(2)ネイティブの英語に慣れること—がありました。次いで、受講生は講座終了後TOEFL-ITPを受験しましたが、そのテスト結果は、受講生に自己の英語力を客観的に理解してもらうこと、また受講生の英語習熟度レベルがわかることで、SHEPのシラバス作成に必要な情報を提供しました。その後、担当講師の評価とTOEFL-ITPの成績を考慮して、10名の参加候補者を選出しました。それから、小林裕和先生（生活健康科学研究科長）と協力して、直前オリエンテーションを2回開きました。その中で、SHEPの目的やOSUでの生活上の注意点等の周知は勿論ですが、先の集中講座でわかったこと—つまり、英語聴解力の強化の必要性—を克

服するために、最近容易に利用できるようになったポッドキャストを利用してリスニング力を向上させる学習方法を紹介しました。（この学習は便宜性もあり、その後、SHEP期間中～現在まで継続利用してリスニング力の向上をがんばっていると受講者から聞いています。）

このように、静岡での準備期間を経て、12月2日に10名の参加者が元気にシカゴ経由でオハイオ州コロンバス市へ出発しました。成田に見送りに行きましたが、いろいろな期待感で、みんなの顔が輝いていたのが印象的でした。移動中、特に問題もなく、予定通り、コロンバス空港に到着。出迎えのバンに乗って、期間中宿舎となる、OSUキャンパス近くのホテルにチェックイン、その夕方にはIJSによるオリエンテーションがあり、いよいよSHEPがスタートしました。翌日、研修の第1日目は、午前中、参加者は時差の関係で眠たかったようですが、静岡では決して経験できないような広大な雪景色と寒さの中、OSUの学生証を発行してもらい、キャンパスツアーをおこない、そして午後にはミシガンテストを受け、第2日目からの授業へ準備を整えました。

第2日目から始まった授業は、参加した大学院生が国際学会等で研究成果を積極的に発表できるように、また博士課程修了後にそれぞれの専門分野でグローバルに活躍できるように、彼らの科学英語コミュニケーション能力の向上に力点を置いて、進められました。担当講師はBill Holschuh先生で、午前中3時間の授業中、5分間の小休憩が2回あるだけで、5冊のテキストを適宜に用いて、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの4技能を統合して（Integrated Approach）学習して行きます。私が授業参観したのは2週目の後半になってからでしたが、学生たちはOSUでの生活や授業に慣れてきたようで、基礎的な文のリスニング、リポート、ディクテーションから始まり、グループディスカッションへと展開していく中、分からない時は手を挙げて質問し、コメントや意見を交換するという言語活動が行われるようになっていました。ビル先生の話によりますと、最初の1～2日間は、授業中に誰も積極的に話さず、大変だったようですが、徐々に、そして少しずつ、話すことに慣れてきたそうです。それから、「ナチュラルスピードの英語」は参加者にとって最初はむずかしく理解するのが大変だったようで、その困難点を克服するために、授業は毎時

間、基本文型のセンテンスを聞いて、まず耳で理解し（リスニング）、次にそれをリピートし（スピーキング）、そして書く（ライティング）、最後に自分で書いた文を読む（リーディング）、という一連のプラクティスから始まっていました。参加者へ実施したアンケート調査によりますと、「リスニングが難しい。このディクテーションが‘非常に役に立った’」という回答が多くありました。

毎週金曜日は、学生たちがビル先生と1対1で面談をおこなうチュートリアルです。これは、オーラルプレゼンテーションに向けて個人指導を受けるといった内容でした。このような英語での個人面談は、おそらく、参加者のほとんどがこれまで受ける機会がなかったでしょうから、よい学習となりました。つまり、チュートリアルではとにかく何か英語でコミュニケーションしなければならないわけですから、クラスであまり口を開かなかった参加者も「誤りを恐れず、恥ずかしがらずに、ゆっくり時間をかけて英語を話すこと」ができたわけです。その成果は、研修最終日の研究発表で現われました。10名の参加者の一人ひとりが10分間のオーラルプレゼンテーションをパワーポイントのスライドを使用しながら、はっきりと、わかりやすい英語で各自の研究内容について発表できました。今回の発表でビル先生から与えられた課題は、「専門知識があまりない人たちでも理解できるようなプレゼンテーションをすること」でしたので、学生たちにとってははかえってむずかしかったようですが、グローバルコミュニケーション能力の育成という観点から見れば、とても有意義な学習ではなかったでしょうか。

3週間の研修期間中、学生たちは各自の研究分野と関連した研究室を訪問して、OSUの先生たちや大学院生たちと意見交換やディスカッションをして、交流を深めました。例えば、薬学部の Yasuro Sugimoto先生、Duxin Sun先生、栄養科学部の Monica Guisti先生、応用薬学部の Kathy Mulligan先生、Kay Wolf先生、人間栄養学部の Earl Harrison先生、Mark Filla先生と学生たちは前もってアポイントメントを取って、話に行きました。また、食品栄養科学専攻の参加者はキャンパス内にある大学病院を訪問して、管理栄養士の仕事等を見学しました。海外の研究機関における、このような大学院生レベルの研究室訪問や学術交流はなかなか実現し難いものですが、OSUの中山先生の協力により、また9月に研究連携体制を整備するためにOSUを表敬訪問した4名の事業推進担当者（奥、小林、大橋、合田）の事前準備により、可能となったことは参加者にとって有意義な研究活動となったと思います。

このような内容の充実した3週間の研修を終えて、12月25日に帰国しました。その後、年が明けてから、参加者10名は研修報告会に出席し、指導の先生方や後輩たちの前でOSUでの研修成果の一部としてオーラルプレゼンテーションを行いました。英語でコミュニケーションすることに対して自信ができたのではないかという印象を受けました。非常に大きな成果

です。

さらに、今回のSHEPの成果として、リスニング力の向上を挙げるができます。研修終了時に実施したアンケート調査によりますと、参加者が最初に直面した問題点としてリスニング力の不足と日常会話の難しさがありました。そして興味深い点は、参加者が研修によって自信ができたと感じたのはリスニング力の向上でした。確かに、2週間目の授業になると、先生からの指示や話は十分に理解できていたようで、質問したり、あるいはコメントを述べたりしていました。また、修了式後の集まりで全く躊躇せず、積極的に英語で話しかけて行く学生たちの言語行動にSHEPの大きな成果を見ました。さらに、研修前後に受けたミシガンテストの結果を比べてみますと、英作文力が顕著に伸びていました。例えば、書かれた英文の量が研修後は研修前の2倍以上になっていましたし、内容がわかりやすくまとめられていました。これらは、教室でのディスカッションやチュートリアルでの個人面談等を通して、学生たちが一定の時間内で自分の考えを論理的に、整理して表現できるようになったのではないかと考えられます。このように、2007年度の第1回SHEPは3週間という短い研修期間でしたが、研究室訪問等に加えて、オーラコミュニケーションに必要なリスニング力の向上、英語で論理的にまとめて表現する能力、積極的にコミュニケーションに参加する態度の育成など、大きな成果を上げることができました。第2回SHEPは今年6月16日から7月25日まで6週間、TOEFL-ITPのスコアと英語インタビューから選出された8名が参加します。2007年のアンケート調査で要望の多かったカンバーセッションパートナー制度を2008年は導入します。

最後になりましたが、9月からの準備、12月実施という強行スケジュールの中、このように実り多き第1回SHEP実施にご協力いただいたオハイオ州立大学の関係者の皆さまー中山峰治先生（プログラムコーディネーター）、Bill Holschuh先生（シラバス作成・担当講師）、Janet Stucky-Smith日本研究所副所長（オリエンテーション・宿舎手配等のロジスティックス）、Gary Whitbyアメリカンランゲージプログラム所長代理（運営事務管理）、Sheri Gangluffアメリカンランゲージプログラム副所長（事務補助）、そして学生たちの日常生活を支援してくれたKenさんーに心から感謝いたします。ありがとうございました。



## 発達した英語耳と感じ取れた英語のリズム

SHEP参加者 植草 義徳（生活健康科学研究科 博士後期課程2年）

私たち博士後期課程の学生は、研究成果を学術論文としてまとめ、時には国際学会で報告し、さらに他国の研究者と意見交換を行うなど英語に接する頻度が高く、英語コミュニケーション能力の重要性を常日頃から感じています。そのような中、2007年12月に約3週間、アメリカのオハイオ州立大学（The Ohio State University, OSU）にて静岡県立大学グローバルCOEプログラムの一環であるShizuoka Health Sciences English Program (SHEP) が開催されました。私は、苦手とするリスニング及びスピーキング能力を向上させることで、国際学会での英語によるプレゼンテーションが聞き取れず理解できない、質問したいのに話せず躊躇してしまうといった悔しい経験から解放されるのではないかと思います、この短期英語研修プログラムに参加しました。偶然にも出国直前にいくつかの国際学会に参加したことから、英語学習に対するモチベーションが良い感じに上がった状態での渡米となりました。



成田を出発し日付変更線を越え、シカゴ経由でOSUのあるコロンバスに到着しました。空港からアメリカの町並みを眺めながら車で

しばらく走ったところに、その広大なOSUのキャンパスがあります。そのスケールの大きさに圧倒されながら宿泊地に到着した私たちはさっそくオリエンテーション後にOSU周辺を散策しました。歩いている途中や店の中で聞こえてくるのは当然の如く英語ばかり。しかも普段なじみ深い科学英語ではなく、口語中心の日常会話。これから3週間本当にやっていけるのだろうかと思差による眠さと戦いながら不安になったのを覚えています。

私たちを指導して下さったBill先生の授業はとても丁寧で興味深い内容が多く、あっという間に一日の授業時間が過ぎてしまうほどでした。教科書を用いた授業はもちろん、英文聞き取り問題や科学英語プレゼンテーション練習、そしてOSUで実際に教壇に立たれている先生の特別講義など、日常的な会話から実践的な科学英語まで幅広く学べるものが多かったです。また、授業のない午後の時間は各自で図書館に向かい、宿題や予習、そしてリスニング教材を用いた自己学習などわずかな時間でも有効に活用し、英語に向き合うという生活を続けていました。

最初の一週間は慣れない土地で生活するという環境の変化に苦勞していた私たちですが、時間が経つにつれて心に余裕ができ、以前と比べて自然に英会話が聞き取れるようになっていきました。冒頭で述べたように、今回のプログラムで私は特にリスニング・スピーキング能力の改善に重点をおいていたのですが、この研修期間中にいくつか気が付いた点がありました。一つ目は、常に英語が聞こえてくる環境において、自分の耳がどんどん英語耳になっていくということです。耳が無意識のうちに英語を聞き取ろうとがんばっているのか、最初は英語かどうかわからなかった会話が英語に聞こえ始め、そして内容もだんだん理解できるようになってきたのです。二つ目は、英語耳を発達させるためには自分も正しい発音をし、正しいストレス（アクセント）の取り方を身につけなければいけないということです。つまり自分が間違った発音で覚えていた単語は、ネイティブの人との会話の中で出てきても自分の知らない単語だと認識してしまい、会話を見失ってしまう原因になってしまうのです。また、口語的な用法（ellipsisやreduction, want to = wanna）の仕組みを知ったことも、英語耳をより発達させる手助けになったと感じています。さらにネイティブの人たちが話す英語にはリズムのようなものがあり、この独特のリズムも少しですが感じ取ることができて良かったと思っています。

残念ながら今回はカンパセーションパートナー制度がなかったため、現地の学生と話す機会がほとんどありませんでした。しかし、現地で私たちの生活をサポートしてくれたKenとの何気ない会話が勉強になり、非常に有意義な時間でした。文化の違いも肌で感じる機会が多く、一人一人の自主性・積極性が重んじられ、何かしたいことがあっても自分から動かないと周囲は何もしてくれないという、日本とは違う生活様式についても再認識しました。さらに、今回の研修プログラムでは私の研究分野に関係するいくつかの研究室を訪問する機会もあり、OSUで研究活動をされている先生と1対1でお話することができました。特別に研究室のセミナーまで参加させて頂けたのはとても貴重な経験でした。セミナーにおける現地学生たちの積極的な討論に圧倒されたのを今でも鮮明に覚えています。

OSUのキャンパスにリス達（リス）が走り回る光景を見慣れてしまった頃には、もう研修期間の3週間が過ぎてしまいました。向こうでの生活にも慣れ始め、私の英語耳と英語脳エンジンがようやく暖まり動き出そうとしている時の帰国で、3週間は短く、もう少し滞在して勉強できればと少し残念に思いました。しかし全てが新鮮で良い経験となり、何よりも今後の自分に自信がつかしました。また、プログラム終了

後も英語学習に対する意欲は衰えず、現在もiPodを利用したリスニング学習やセミナー等への積極的な参加を心がけています。さらに、外国人の方に自分から積極的に話しかけられるようになった、「外国人慣れた」というのも大きな成果だったと感じています。今回私たちは最初のSHEP参加者でしたが、良かった部分は積極的に取り入れ、改善できる点は見直し、第2回SHEPにつなげて頂けたらと思っています。

最後になりましたが、私たちの英語学習に大きなご支援・ご協力をして頂きましたOSU関係者の皆様、静岡県立大学グローバルCOE関係者の皆様、そして共に四苦八苦しながら英語を学習した博士後

期課程の参加者に心より感謝致します。



## 第一回 SHEP に参加して

SHEP参加者 小川 剛史（生活健康科学研究科 博士後期課程3年）

私は2007年の12月に実施された第一回静岡健康科学健康英語研修プログラム（Shizuoka Health Sciences English Program, SHEP）に十名のメンバーの一人として参加させていただきました。このプログラムの概要については吉村教授が書かれているので、私はプログラムの印象・感想を中心に述べたいと思います。

研修地であるオハイオ州は東海岸よりに位置し、時間帯はニューヨークと同じです。つまり合衆国の中でもより日本から遠いほうに位置します。また、高緯度に位置するため研修当時はダウンジャケットが必須といえるほど寒い気候でしたが、メンバーの多くがその寒さを楽しんでいるようでした。ちょっとしたことで気持ちを盛り上げていこうとする雰囲気私達の間にあったように思います。私自身これまでに海外旅行の経験はありましたが、三週間の短期間とはいえ「海外で生活する」というのは初めてであり、さまざまな期待と不安を感じつつのスタートでした。実際、最初の数日の間にコミュニケーションに必要なListening, speakingといった各能力の不足という現実を痛感し、時差ボケや食生活の違いなどに悩まされているうちに最初の一週間が過ぎ去ったように思います。

食生活には最後まで慣れませんでした。正直なところオススメはジャンクフードです。また、当然ながら目にする文字は全て英語です。CNNも同様です。最初のうちはホテル隣にあるコンビニ店員の「With bag?」さえ何かボソボソと言っている程度にしか聞こえませんでした。それでも私達が英語学習への意欲を失う事なく全員が皆勤で授業へ参加し続けることができたのは、授業を担当して下さったBill先生によるところが大きかったのではないかと思います。私達は多くの日本人と同様に、文法は理解しているがオーラルコミュニケーションは不得意という状態でした。先生は私達の英語力を把握した上で、最適と思われる授業内容を組んで下さいました。特に私達にとってListening dictationとう訓

練法は英語に慣れていく上で非常に効果的でした。是非とも義務教育に取り入れて欲しいです。また、出発前に貸与していただいたiPodを用いてのListeningの訓練もナチュラルスピードの英語に対応するのに効果的であったと思います。そういった少しずつの積み重ねが私達の英語力を徐々に向上させていったと言えます。もっとも合衆国内でも地域によって喋る速さは異なるようで、一般に都会であるほど早いそうです。研修を行ったOSUのあるオハイオ州都コロンバス市は人口約70万人であり、日本でいう政令指定都市には及びませんが、全米15位であることからおそらく早口な方でしょう。

さすがに二週目以降は各メンバーとも気持ちに余裕が持ちはじめた様子で、授業中の先生との会話もより積極的に行われるようになっていきました。また、OSUの学生に案内していただいた、アメリカンなスーパーマーケットでのショッピングな体験は、私達にアメリカで生活しているという事を印象づけてくれました。しかし、三週間とは短いもので、私自身が手ごたえを感じはじめたあたりであえなく帰国となりました。それでもプログラムの最初と最後に行われたテストでスコアが上昇しており、数値としても英語能力の向上が現れた事は大変嬉しく思います。また、スコアに関わらず今回のプログラムは十名のメンバーそれぞれにとって有意義なものになったのではないのでしょうか。

私はiPodを現在も活用しておりますし、洋画を鑑賞する際には字幕だけでなく、俳優さんの英語そのものにも無意識のうちに注意を向けるようになりました。この事は自分でも驚いております。

最後になりましたが、私達のためにSHEPを計画、支援して下さった静岡県立大学およびOSUの多くの先生方、スタッフの皆様へメンバーを代表して深く感謝いたします。

ありがとうございました！！（メンバー一同）

# フィリピン留学体験記

私は2007年9月から半年間、フィリピン大学で勉強しました。私は大学入学前から東南アジアの国々に興味を持ち、フィリピン語や東南アジアに関する授業を履修してきましたので、今まで学んできたフィリピン語を使ってみたい、授業で学んだことを実際にこの目で確かめたいという思いで、フィリピンに赴きました。フィリピンを訪れるのは初めてではありませんでしたが、それでも滞在中は様々な新しいことに出会いました。残念ながら、ここでは私の経験をすべてお伝えることはできませんので、その一部を報告したいと思います。

## 【多様性に富むフィリピン】

私は三年次に履修した「文化社会人類学」という授業をきっかけに、発展途上国の観光開発に興味を持ったので、フィリピン大学では観光に関する授業を履修しました。

フィリピンは七千もの島々から成り、様々な民族が独自の文化を持っています。それはフィリピンを訪れる観光客を魅了する一つの要因です。また、豊かな自然は海外からの旅行客だけでなく、国内に住むフィリピン人自身にとっても大きな魅力です。私が履修した授業では、フィリピンの文化とは何であるのか、フィリピ



寮内の日本文化を紹介するイベントで日本舞踊を披露

の魅力はどこにあるのかをクラス中でディスカッションしました。フィリピン大学は全国から学生が集まる国立大学で、級友の出身地も実に様々でした。授業では、地方出身の学生が自分の故郷の言語や食べ物、建物の特徴や伝統の祭りなどについて紹介してくれましたが、その中で私は、フィリピンが実に多様性に富んでいることを実感しました。また、日本の文化について聞かれることも多く、自国について考える良い機会ともなりました。

## 【他国からの留学生との交流を通じて】

フィリピン滞在中、私は学生寮に住んでいました。寮ではフィリピン人、日本人、韓国人をはじめ、多くの留学生が共に生活しています。それぞれの留学生は国籍も専門も様々ですが、私たちは毎晩、寮内の共同スペースで一緒に勉強しました。時には、それぞれの国の料理を持ち寄って夕食を共にしたり、互いの宗教や慣習、伝統文化やポップカルチャーについて意見を交換したりしました。そこでは互いに相手のバックグラウンドを尊重し合い、私たちは本当の意味で異文化を知ることができたと思います。寮で得られた友情や様々な背景を持つ友人との意見交換は、フィリピン滞在中の最大の収穫です。私は、

## 国際関係学部 国際関係学科 4年 勝見 舞子

この友人たちとの交流を通じて、今までよりも広い視野を持つことができたと感じています。

### 【県大への元交換留学生を訪ねて】

大学の中だけではなく、私はフィリピンのあちこちを旅行しました。クリスマスには、一昨年前に県立大学に来ていたLyndielou Egnarさんのご実家、ミン



ダナオ島ブキッド 様々な料理が並ぶ寮恒例のポットラックパーティーノ州を訪ねました。また、大晦日からお正月にかけては、昨年の交換留学生であったRoselyn Tomasさんのご実家がある、ルソン島北イロコス州でお世話になりました。Lyndielouさんのご家族も、Roselynさんのご家族も、私を本当の家族の一員のように扱ってくれ、本当に良い時間を過ごせました。私もフィリピンに新しい家族ができたようでとても嬉しかったです。「フィリピン式」のクリスマスとお正月は、まさに貴重な体験でした。ぜひ皆さんにもフィリピンを訪れて味わっていただきたいと思います。

### 【フィリピン～日本と異なる世界～】

地図を見れば直ぐに分かりますが、フィリピンは単に距離から考えると、日本からそう遠くありません。しかし、人々の生活という点から考えると大きく異なります。頭が痛くなるようなマニラの交通渋滞、排気ガス、人ごみ、路上で物乞いをする老若男女、町中に散らばったゴミなど、「日本だったら有り得ない」ということでマニラは溢れていました。はじめのうちは一つ一つの違いに腹が立ったり、疑問に感じたりしましたが、今では「これもフィリピンの一部なのだ」という思いで、それらの違いを観察することができるようになりました。日本を離れてみて、初めて自分のいた環境のほかにも世界があったのだということが実感できました。

半年間の交換留学は単に「留学」という意味を超えて、私の今後の人生観や物の見方に大きく影響するものでした。今回このような機会を与えていただいたことに対し、深く感謝するとともに、今後の派遣学生にとっても実り多い留学となるよう、フィリピン大学との友好関係、またフィリピンと日本との友好関係が長く続くことを願っています。



県大に来ていた交換留学生と別れを惜しむ

## ● 教員の著書紹介 ●

### 『グローバル社会における異文化間コミュニケーション』

風間書房 全310頁 2008年2月29日刊行 定価3,675円

国際関係学部 教授 西田ひろ子

平成8年7月末から平成14年3月末まで、フィリピン、マレーシア、中国、米国進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦調査を実施し、3,194名の回答者、177社の企業の協力をいただきました。この調査は、異文化間コミュニケーション摩擦という、グローバル化が進む現代社会で顕著な現象の解明に挑んだものです。それまでの調査は、文化背景の異なる人々間のイメージの相違やケーススタディによる摩擦データ収集といった研究、さらにアメリカ的な「個人主義 対 集団主義」といった観点から異文化の人々の行動を分類するという研究が行われていました（これらの議論は、西田ひろ子編（2002）「マレーシア、フィリピン進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦」多賀出版 と西田ひろ子編（2007）「米国・中国進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦」風間書房 を参照してください）。それらの研究の多くは、研究成果を実際の現場で活用するという観点がありませんでした。これまでの異文化間コミュニケーション研究は「研究のための研究（実際の現場で活用するという意識が希薄）」のように思われました。このような現状を打破するために、収集・分析したデータを現場で使うことができる理論を構築し、この理論に基づいた調査手法を開発して実施してきたのが、この調査です。この調査の基盤は認知理論です。「文化背景が異なれば脳に獲得される知識が異なり、これが異なった行動様式、考え方を作り上げている」という考え方です。この理論により、「文化の相違により、どのような状況ではどのような行動様式・考え方に違いがあるのか。それはなぜか」という問に対する答え（文化の相違に基づく人間行動の違いの説明）とデータの収集方法の確立が可能になりました。この調査結果につきましては、「セッション3」にまとめました。さらに、本書の特色は、調査対象となった4カ国の5民族（中国人、中国系マレーシア人、マレー系マレーシア人、フィリピン人、アメリカ人）と日本人の間にはどのようなコミュニケーション行動上の違いがあるかについて文献調査も実施したことです（「セッション1」にまとめました）。また、海外進出日系企業には、日本国内の本社とどのような経営上の違いがあるかについて「セッション2」にまとめました。これらを総合的に捉えていただければ、「日本人と現地管理職（中国人、中国系マレーシア人、マレー系マレーシア人、フィリピン人、アメリカ人）の間にはどのような異文化間コミュニケーション摩擦があるか」をご理解いただけるのではないかと思います。（注：本書は、平成19年度科学研究費補助金研究公開促進費（「研究成果公開発表(A)」講演収録集「グローバル社会における異文化間コミュニケーション」（研究代表者 西田ひろ子、課題番号 1741004）によって刊行）



### 『記憶の中のファシズム — 火の十字団とフランス現代史 —』

講談社 全259頁 2008年3月10日刊行 定価1,680円

国際関係学部 准教授 剣持 久木

「ファシズムの時代」と呼ばれた1930年代ヨーロッパにあって、フランスだけは例外だったと考える人は多い。フランス革命以来、民主主義の伝統がもっとも根付き、反ファシズムを掲げた人民戦線政府がファシズムの上陸を阻止した国である、というイメージが強いからである。しかしながら、反ファシズムという旗印には、仮想敵としてのファシズムの存在が必要だった。かくして反ファシズム運動の格好の標的とされたのが、退役軍人フランソワ・ド・ラロック中佐率いる団体「火の十字団」である。

本書は、1930年代に形成された「ラロック=ファシズム神話」が、逆説的な意味において、人民戦線政府の生みの親になる過程と、その神話が第二次世界大戦後も長く影をおとすことになる状況を検討したものである。その際、神話がいかに実態と乖離したものであったのかということと明らかにするとともに、第二次世界大戦直後にラロックが亡くなった後で、ラロックの遺族が今日に至るまで故人の名誉回復に奔走した姿を追跡している。フランス現代史における「神話」というと、「第二次世界大戦中の（ドイツに占領された）フランスでは皆が抵抗していた」という「レジスタンス神話」の存在が比較的良好に知られている。本書が描こうとしているのは、もう一つの神話、「ファシズム神話」という集合的記憶の盛衰からたどる、もう一つのフランス現代史の姿でもある。



### 『福澤諭吉 — 文明の政治には六つの要訣あり —』

ミネルヴァ書房 全440頁 2008年5月10日刊行 定価3,150円

国際関係学部 助教 平山 洋

現行版全集への疑い

一九九〇年代まで、私もまた現行版『福澤諭吉全集』の無誤謬性を信じていたので、「学問のすすめ」初編（一八七二年刊）と、日清戦争後の無署名社説「台湾の騒動」（一八九六年発表）を読んで、その肌合いの違いに奇妙な感じを覚えつつも、後者もまた皆が認めている論説だから、と無理に自分を納得させていたのであった。

九〇年代末、小泉仰と西川俊作の紹介により、井田進也の無署名論説真偽判定に関する研究に触れたことで、自らその判別の方法を探って、ついに全集「時事新報論集」所収の無署名社説の相当数が、福澤とは無関係であるという確信をもつに至った。

その結論までの過程を描いた『福澤諭吉の真実』（二〇〇四年刊）の延長上に、本書『福澤諭吉』はある。現在までのすべての伝記が依拠している石河幹明の『福澤諭吉伝』には頼らないようにしたため、資料の探索に手間取り、調査開始から完成まで三年三カ月を要した。

新たな福澤像

そこで本書の新しさは概ね次の四点である。まず第一に、確実な資料に基づいて、<市民的自由主義者>福澤の姿を示せたことである。彼は徹頭徹尾、「文明政治の六条件」をアジアに広めようとした伝道者であった。<侵略的絶対主義者>の証拠として今日批判されている無署名社説は、存命中には福澤作とは見なされていなかったのである。

また第二として、福澤の思想形成に郷里の儒者野本真城が大きな影響を与えていたということも、今回初めて明らかになった事実である。さらに第三として、維新後明治一四年政変までの著作は、議院内閣制度を定めた憲法の制定を政府に迫る活動であったことが、証明されたことである。最後に第四として、巻末掲載の資料により、従来まで過大評価されていた日清戦争以降の言論活動には根拠がないということが、明確化できたことである。

これらの新見地により、福澤諭吉像は大きく変更されることと思う。（文中敬称略）



# 研究助成採択

## 平成19年度飯島記念食品科学振興財団学術研究助成

研究者：代表：食品栄養科学部 准教授 熊澤茂則  
 共同研究者：食品栄養科学部 助教 石井剛志  
 食品栄養科学部 助教 三好規之  
 研究課題：タンパク質結合活性を指標とした高機能性を有する穀物ポリフェノールの探索

## 平成20年度財団法人発酵研究所研究助成

研究者：薬学部 教授 鈴木 隆  
 研究課題：インフルエンザウィルスによる糖鎖受容体認識の多様性と宿主域を規定する分子基盤の解明

## 平成20年度財団法人日本科学協会笹川科学研究助成

研究者：薬学部 助教 高橋 忠伸  
 研究課題：インフルエンザウィルス受容体シアル酸を含有しないウィルス結合性糖脂質の感染における機能解明

## 平成20年度日本学術振興会特別研究員（DC2、DC1）

研究者：田代京子 大学院薬学研究科博士後期課程  
 研究課題：新規EGF受容体制御因子の機能解析—創薬標的分子としての検証

研究者：ライ インリン 大学院生活健康科学研究科博士後期課程  
 研究課題：糖尿病合併症の発症機構としての糖化最終産物によるNO生成の異常制御

研究者：鈴木拓史 大学院生活健康科学研究科博士後期課程  
 研究課題：小腸吸収細胞の分化および栄養素摂取に伴う遺伝子発現のエピジェネティック制御

研究者：鰐淵清史 大学院薬学研究科博士後期課程  
 研究課題：植物ポリケチド合成酵素の構造機能解析

## 平成20年度財団法人日本食品科学研究振興財団研究助成

研究者：代表：食品栄養科学部 教授 中山 勉  
 分担者：食品栄養科学部 助教 石井剛志  
 食品栄養科学部 准教授 熊澤茂則  
 研究課題：植物ポリフェノールの酸化安定性を改善する食品素材の探索  
 —食品蛋白質および環状多糖類との相互作用による安定化—

## 平成20年度社日本透析医学会コメディカルスタッフ研究助成

研究者：代表 食品栄養科学部 助教 大川栄重  
 研究課題：血液透析患者の炎症反応および栄養状態に対する腸内細菌叢の影響

## 平成20年度 科学研究費補助金採択状況

【年度別 採択件数】

年度	新規課題		継続 課題	合計
	応募	採択		
12	162	27	35	62
13	162	23	30	53
14	189	36	34	70
15	184	33	44	77
16	149	25	50	75
17	163	40	38	78
18	192	37	48	85
19	182	39	44	83
20	187	41	59	100

【平成20年度 部局別 採択件数】

部 局	新規課題		継続 課題	合計
	応募	採択		
薬 学 部	64	13	18	31
食品栄養科学部	38	6	10	16
国際関係学部	18	7	8	15
経営情報学部	10	2	6	8
看護学部	13	4	7	11
環境科学研究所	21	3	6	9
短期大学部	23	6	4	10
合 計	187	41	59	100

【平成20年度 研究種目別 採択件数】

研究種目	新規課題		継続 課題	合計
	応募	採択		
基盤研究（S）	0	0	0	0
基盤研究（A）	3	1	0	1
基盤研究（B）	24	6	7	13
基盤研究（C）	88	15	35	50
萌芽研究	22	0	3	3
若手研究（スタートアップ）			2	2
若手研究（S）	2		0	0
若手研究（A）	2	0	1	1
若手研究（B）	35	16	10	26
特定領域研究	10	2	1	3
研究成果公開促進費	1	1	0	1
合 計	187	41	59	100

※20年度新規転入者を含む

平成20年度に新規採用された研究代表者及び研究課題

基盤研究 (A)

六鹿茂夫	国際関係学部	教授	黒海地域の国際関係－4次元分析による学際的総合研究
------	--------	----	---------------------------

基盤研究 (B)

横越英彦	食品栄養科学部	教授	食品香気成分と心身ストレス及び情動制御に関する研究
鈴木直義	経営情報学部	教授	動作実習遠隔指導システムの開発－フィジカル・アセスメントスキル訓練への応用－
阿部郁朗	薬学部	准教授	二次代謝酵素の結晶構造解析を基盤とする酵素機能の開拓と物質生産
奥直人	薬学部	教授	逆標的化DDSを用いたアレルギー・免疫疾患療法の開発
今井康之	薬学部	教授	侵害刺激受容チャンネルを経由した化学物質の接触感作促進 (アジュバント) 作用の解明
湖中真哉	国際関係学部	准教授	東アフリカ・マー系社会の地域セーフティ・ネットに基づく在来型難民支援モデルの構築

基盤研究 (C)

木苗直秀	食品栄養科学部	教授	糖尿病発症時におけるがん誘発メカニズムに関する基礎的研究と食品成分による制御
橋本伸哉	環境科学研究所	教授	微生物共存系におけるハロカーボン類の高速分析法の開発と共存系での動態解析
水野かほる	国際関係学部	准教授	中国語話者の複合語アクセント習得に関する研究
吉村紀子	国際関係学部	教授	海外短期語学研修が英語力養成に及ぼす影響について－作文力の向上と石化現象－
岩堀康祐	環境科学研究所	教授	異化的鉄還元を利用した新たな重金属含有排水処理システムの構築
豊岡利正	薬学部	教授	科学的根拠に基づくデザイナードラッグ等違法ドラッグの乱用防止に関する研究
伊藤邦彦	薬学部	教授	オーダーメイド癌治療を目的としたエピトープペプチドワクチンの作製と臨床応用
合田敏尚	食品栄養科学部	教授	消化管における遺伝子発現リズム発振の分子基盤に関する研究
小寺栄子	看護学部	教授	変革期の看護部門トップマネージャーに求められる役割とコンピテンシー
奥原秀盛	看護学部	准教授	緩和ケア病棟入院中のがん患者の家族を対象とするサポートグループに関する研究
増田明美	短期大学部	講師	保健問題を抱える通信制高等学校生徒への保健支援プログラムの開発
江原勝幸	短期大学部	准教授	多層的ネットワークによる災害時要援護者支援を目的とする災害福祉活動に関する研究
永野ひろ子	短期大学部	講師	共感を指標にマイクロカウンセリングを導入したコミュニケーションスキルトレーニング
白石葉子	短期大学部	講師	看護師の負担を軽減する体位変換・移乗介助技術の病院環境への導入
松尾ひとみ	短期大学部	教授	心臓手術後に水分制限をうける学童への「飲みたい時に飲む」ケアのガイドライン開発

若手研究 (B)

大川栄重	食品栄養科学部	助教	小規模医療施設における栄養指導の治療および経済効果に関する調査
新井英一	食品栄養科学部	准教授	栄養感知システムを介した新たな肥満予防に対する分子基盤の解明
大浦健	環境科学研究所	助教	広域・長時間分解観測によるハロゲン化多環芳香族類の環境動態解析とリスク評価
吉田真樹	国際関係学部	講師	日本における「死者」の観念をめぐる倫理思想史的研究～神仏観念との関わりを中心に～
伊藤一頼	国際関係学部	講師	国際法学における開発問題の再定位－脱植民地化過程における自決権の機能に着目して－
松森奈津子	国際関係学部	講師	後期サラマンカ学派の政治理論－カトリック的近代国家論の体系化
上野雄史	経営情報学部	助教	保険請負の公正価値評価がもたらす企業行動の変化とその経済的影響
伊藤創平	生活健康科学研究科	助教	新奇テルペル合成酵素の構造と機能に関する研究
江木正浩	薬学部	講師	複合金属触媒によるプロパルギルアルコールの高速転位反応の開発と合成化学的応用
清水広介	薬学部	助教	新概念、リンパ管新生がもたらすがん標的化リポソームDDSへの影響
尾上誠良	薬学部	講師	慢性閉塞性肺疾患治療を目指した新規機能性ペプチド及び粉末吸入製剤の戦略的開発
林秀樹	薬学部	講師	リウマチ患者の生活の質向上を目指したオーダーメイド薬物療法の開発
五十里彰	薬学部	准教授	マグネシウム再吸収の調節に関与する新規パラセリンー1分子複合体の解明
高橋忠伸	薬学部	助教	インフルエンザウィルス結合性アジア口糖脂質の感染機構における機能グライコミクス
熊坂隆行	看護学部	助教	看護ケアとしての「動物介在」が入院患者に及ぼす効果とその評価システムの構築
寺内英真	看護学部	講師	術後せん妄ケア・アルゴリズムの臨床的有用性に関する実証研究

特定領域研究

奥直人	薬学部	教授	難治がんの克服を目標した発展型腫瘍新生血管標的化DDSに関する研究
川島博人	薬学部	准教授	血管内皮へパラン硫酸による細胞外環境シグナルの調整

研究成果公開促進費

佐々木隆志	短期大学部	教授	日本における終末ケアマネジメントの研究
-------	-------	----	---------------------

継続課題の研究代表者

基盤研究 (B)	石川准 (国際関係学部 教授)、川島博人 (薬学部 准教授)、鈴木隆 (薬学部 教授)、野口博司 (薬学部 教授)、剣持久木 (国際関係学部 准教授)、雨谷敬史 (環境科学研究所 准教授)、武田厚司 (薬学部 准教授)
基盤研究 (C)	大楠英三 (国際関係学部 准教授)、白尾久美子 (看護学部 准教授)、貝沼やす子 (食品栄養科学部 教授)、谷幸則 (環境科学研究所 准教授)、栗田和典 (国際関係学部 教授)、西田公昭 (看護学部 准教授)、山浦一保 (経営情報学部 講師)、左一八 (薬学部 准教授)、熊澤茂則 (食品栄養科学部 准教授)、小林公子 (食品栄養科学部 准教授)、増田修一 (食品栄養科学部 助教)、下位香代子 (環境科学研究所 教授)、伊吹裕子 (環境科学研究所 准教授)、星野昌裕 (国際関係学部 准教授)、澤田敬人 (国際関係学部 准教授)、末松俊明 (経営情報学部 准教授)、小林みどり (経営情報学部 教授)、渡辺達夫 (食品栄養科学部 教授)、中山勉 (食品栄養科学部 教授)、岩崎邦彦 (経営情報学部 准教授)、赤井周司 (薬学部 教授)、齋藤真也 (薬学部 准教授)、香谷純子 (薬学部 教授)、池田潔 (薬学部 准教授)、三輪匡男 (薬学部 客員教授)、小野孝彦 (薬学部 教授)、大橋典男 (食品栄養科学部 教授)、日吉孝子 (看護学部 講師)、岡本恵里 (看護学部 非常勤講師)、石川吉伸 (薬学部 准教授)、三輪真知子 (看護学部 教授)、漁田俊子 (短期大学部 教授)、今福恵子 (短期大学部 助教)、佐々木隆志 (短期大学部 教授)、藤原愛子 (短期大学部 教授)
萌芽研究	谷晃 (環境科学研究所 准教授)、小林裕和 (生活健康科学研究科 教授)、松田正巳 (看護学部 教授)
若手研究 (スタートアップ)	井川貴詞 (薬学部 助教)、海野雄加 (薬学部 助教)
若手研究 (A)	藤澤由和 (経営情報学部 准教授)
若手研究 (B)	井下裕子 (看護学部 助教)、三好規之 (食品栄養科学部 助教)、岩倉さやか (国際関係学部 講師)、石井剛志 (食品栄養科学部 助教)、脇本敏幸 (薬学部 助教)、黒羽子孝太 (薬学部 助教)、浅井知浩 (薬学部 講師)、若尾康範 (薬学部 助教)、菅嶋泰成 (食品栄養科学部 助教)、廣瀬陽子 (国際関係学部 准教授)
特定領域研究	丹羽康夫 (生活健康科学研究科 助教)

## 外部資金受入状況

〈年度別受入状況〉

(単位：件、千円)

年度	奨学寄附金		受託研究		共同研究		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
平成12年度	16	118,100	0	0	0	0	16	118,100
平成13年度	74	122,410	21	79,107	4	5,719	99	207,236
平成14年度	82	88,389	25	64,532	10	86,700	117	239,621
平成15年度	143	96,364	21	52,055	7	65,200	171	213,619
平成16年度	130	103,465	27	96,296	12	61,200	169	260,961
平成17年度	115	119,351	37	249,061	17	29,550	169	397,962
平成18年度	108	126,329	27	250,451	20	44,500	155	421,280
平成19年度	104	117,795	56	322,203	23	54,477	183	494,475
計	668	774,408	158	791,502	70	292,869	896	1,858,779

〈平成19年度受入状況〉

(単位：件、千円)

年度	奨学寄附金		受託研究		共同研究		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
全学	8	26,600	0	0	0	0	8	26,600
薬学部	42	39,800	22	171,519	13	26,143	77	237,462
食品栄養科学部	23	22,900	12	101,900	6	24,300	41	149,100
国際関係学部	0	0	4	7,700	0	0	4	7,700
経営情報学部	8	13,645	6	8,191	2	2,060	16	23,896
看護学部	1	1,200	2	1,150	0	0	3	2,350
環境科学研究所	20	12,600	8	30,943	2	1,974	30	45,517
短期大学部	2	1,050	2	800	0	0	4	1,850
計	104	117,795	56	322,203	23	54,477	183	494,475

## 教員の人事、新規客員教授・准教授の紹介

### ■教員の人事

●採用	(4月1日付け)	●昇任	(4月1日付け)	荒川 泰昭	食品栄養科学部	教授
並木 徳之	薬学部 教授	菅谷 純子	薬学部 教授	大磯 正美	国際関係学部	教授
西野 勝明	経営情報学部 教授	宮瀬 敏男	薬学部 教授	カーク.C.ハイド	国際関係学部	准教授
松岡 恵	看護学部 教授	渡邊 貴之	経営情報学部 准教授	児矢野マリ	国際関係学部	准教授
三輪真知子	看護学部 教授	(5月1日付け)		影山 喜一	経営情報学部	教授
石川 吉伸	薬学部 准教授	阿部 郁朗	薬学部 准教授	勝矢 光昭	経営情報学部	教授
廣瀬 陽子	国際関係学部 准教授	(6月1日付け)		五島 綾子	経営情報学部	教授
藤本健太郎	経営情報学部 准教授	谷 幸則	環境科学研究所 准教授	高野加代子	経営情報学部	講師
井上 和幸	薬学部 講師	(7月1日付け)		福田 宏	経営情報学部	准教授
東野 定律	経営情報学部 講師	五十里 彰	薬学部 准教授	竹中 厚雄	経営情報学部	講師
寺内 英真	看護学部 講師	梅原 薫	薬学部 講師	岩本 義久	看護学部	教授
岩尾 康範	薬学部 助教	●退職 (3月31日付け)		岡本 恵里	看護学部	准教授
萱嶋 泰成	食品栄養科学部 助教	三輪 匡男	薬学部 教授	西山 里利	看護学部	講師
成川 真隆	食品栄養科学部 助教	糠谷 東雄	薬学部 教授	羽田野花美	看護学部	講師
大久保誠也	経営情報学部 助教	片山 誠二	薬学部 准教授	佐野慶一郎	環境科学研究所	准教授
繁田 佳映	看護学部 助教	佐塚 泰之	薬学部 准教授	(6月30日付け)		
(6月1日付け)		福島 健	薬学部 准教授	兒島 佳子	看護学部	助教
国包 章一	環境科学研究所 教授	大門 貴志	薬学部 講師			
小菅 和仁	薬学部 講師	古田 巧	薬学部 助教			

### ■新規客員教授・准教授の紹介

●教授	中村 好志	椋山女学園大学生生活科学部教授	
三輪 匡男	静岡県立大学名誉教授	●准教授	
鈴木 康夫	中部大学生命健康科学部教授	二村 悟	(株)医院企画プロジェクト主任研究員
大泉 康	横浜薬科大学教授	矢野 友啓	独立行政法人国立健康・栄養研究所補完成分プロジェクトリーダー
米谷 民雄	国立医薬品食品衛生研究所 食品部長	古旗 賢二	城西大学薬学部准教授
千葉 雅俊	田辺三菱製薬(株)創薬研究本部 創剤研究所長	久米 一成	静岡県環境衛生科学研究所 主幹
糠谷 東雄	前静岡県立大学薬学部教授	天野 雅貴	光産業創成大学院大学准教授
佐塚 泰之	岩手医科大学薬学部教授		

## 受賞

### ■平成19年度科学交流フォーラムでポスター賞を受賞

平成20年3月5日に静岡大学で開催された平成19年度科学交流フォーラム（第9回静岡大学ライフサイエンスシンポジウム）において、本学環境科学研究所の榊原啓之助教、本学大学院生活健康科学研究科修士課程2年の村瀬真代さん（食品分析化学研究室）、本学大学院薬学研究科修士課程1年の高森仁奈さん（生物薬品化学講座）、本学食品栄養科学部4年の河田裕希子さん（食品分子工学研究室）がポスター賞を受賞しました。榊原助教が発表した演題は「マウスを用いた社会的環境ストレス負荷モデル」、村瀬さんの演題は「ミツバチの行動観察と化学的分析による沖縄産プロポリスの起源植物の解明」、高森さんの演題は「共に生きることのストレス：社会的ストレスによる脳の老化促進」、河田さんの演題は「カテキン類の酸化安定性を高める食品成分の探索」です。本フォーラムでは、ライフサイエンスというカテゴリーの中で様々な研究分野の発表が行われましたが、受賞した4人は研究内容や発表スキルにおいてそれぞれ高い評価を受けました。



前列：村瀬さん（左側）、河田さん（中央）、高森さん（右側）、  
後列：榊原助教（左側）、本学大学院生活健康科学研究科研究科長小林裕和教授（右側）

### ■第22回望月喜多司記念賞奨励賞を受賞

平成20年3月19日、食品栄養科学部食品衛生学研究室の増田修一助教は、第22回望月喜多司記念賞奨励賞を受賞しました。望月喜多司記念賞は、財団法人食品農医薬品安全性評価センターの創立者である故望月喜多司前理事長の「人類の健康の保持増進、農業生産の向上および地球の環境保全を願う」という崇高な理念を継承するため、1986年以来、「食品・農薬・医薬品等の安全性の分野」と「農薬の分野」の一層の発展を目指して顕著な功績のあった研究者を毎年表彰しています。増田助教の受賞研究テーマは「食品中に含まれる微量化学成分の亜硝酸処理による生成とその制御に関する研究」であり、食品を摂取した場合の含有成分の変異原性・発がん性の変動、さらに他の食品成分による遺伝毒性の制御について解明したものです。



（一番左側が増田助教）

### ■第11回生体触媒化学シンポジウム優秀ポスター賞を受賞

平成20年1月24、25日に鳥取市で開催された「第11回生体触媒化学シンポジウム」で薬学研究科医薬品創製化学講座、修士1年生の根本裕之さんが優秀ポスター賞を受賞しました。この賞は、同シンポジウムのポスターセッションに於いて、研究成果と発表態度の両方に優れた若手研究者に授与されます。根本さんは卒業研究として行った「リパーゼ触媒光学分割によるエトドラクの高選択的合成」についての成果を発表しました。「分割困難な基質にも関わらず、効率的な酵素的光学分割法を見出したこと」が高く評価されました。



## 図書館だより

### ようこそ、「岡村文庫」へ

附属図書館長 小幡 壮

「岡村文庫」の紹介を兼ねて、岡村昭彦氏を含めた三人の「知の巨人」をまず、紹介しましょう。三人とは岡村をはじめとして、「ひょっこりひょうたん島」で文名高い井上ひさしさんと、文化人類学とその周辺の学際分野の世界的泰斗として、つとに有名な山口昌男氏です。「ひょっこりひょうたん島」というのは、学生諸君や若い人にはちょっと古くてピンとこないかもしれませんね。山口氏は、元静岡県立大学の教授で、その後に札幌大学の学長をつとめられた方です。

この御三方は、動機や目的はそれぞれ違っているものの、せっせと本を買い込んで、結果として膨大な蔵書を蓄えてしまった人たちです。そして、それぞれの蔵書が持ち主のもとを離れて、新たな息吹を吹き込まれて「文庫」としてよみがえったことも共通しています。

井上氏の蔵書は、山形県川西町という生まれ故郷の町立図書館内に「遅筆堂文庫」として収められています。もっとも、文庫とはいえ町立図書館の何倍もの蔵書数ですから、遅筆堂文庫のなかに町立図書館があるといった方が正確なのかもしれません。ともあれ、文庫と町立図書館は仲良く共存しています。一方、山口氏の蔵書は札幌大学構内の地下の秘密の空間に「山口文庫」として収められているようです。文庫の書籍のアクの強さのせいでしょうか、あるいはほかに問題でもあったのでしょうか。こちらは大学附属図書館と仲が悪いらしくて、大学からは「呪われた」存在としてあるようです。遅筆堂文庫は、全国から井上ファンやこの文庫にしかない貴重書を求めて、利用者がひっきりなしにやってきました。山口文庫はというと、文字通り秘密の存在らしく、酸いも甘いも噛み分けたような教授連や好事家連中、一風変わった学生たち、正体不明の人たちの間でのみ頻繁に利用されているようです。同じ文庫でありながら、両文庫はかなり対照的な利用のされ方をしていることがわかります。一方は文筆家の文庫で、他方は学者の文庫ということも影響しているのかもしれません。両文庫についてももう少し知りたい方は、井上ひさし『本の運命』と山口昌男

『独断的大学論』を参考にしてください。

さて、肝心の我が附属図書館の「岡村文庫」について紹介しなければなりません。ベトナム戦争取材後、アフリカやアイルランドなどの動乱の世界を駆け巡っていた岡村は、56歳という若さで急逝してしまいました。舞阪町（現浜松市）の自宅には膨大な量の蔵書と資料が残されました。引手数多のなか激しい競争を勝ち抜いて、それらが附属図書館に来たのが、1989年のことです。それ以来、岡村文庫の書籍類は、一般の図書にまじって各フロアの書架に並べられていました。背表紙に「岡村文庫」というシールが貼ってある図書を見かけた人がいると思います。

この度、図書館一階の奥まったところにある書庫を「岡村文庫」のためのスペースとして整備し直しました。そして、この場所に岡村文庫書籍の約1万6千冊を集中的に収めて閲覧できるようにしました。岡村文庫には、いろいろなジャンルの本が収められています。彼なりの分類上のキー・ワードを少しだけ列挙してみましょう。近代国家、国際関係、資本主義、会社・産業史、上下水道、環境汚染、水俣、原子力、国土開発、TVA、ベトナム戦争、くすり、食品、バイオエシックス、遺伝子操作、精神医療、医療・看護、ホスピス、その他まさに枚挙に遑がありません。このように、少しのぞいて見ただけでも本学のすべての学部に関係する学（部）際的分野の貴重書・希少書が収められていることがわかります。

こんな「お宝」が我が県大にもあったのかと驚きを禁じえないと思います。気になる方、興味を抱いた方は直接、岡村文庫を訪ねてください。そして、書棚から一冊の本を手にとって、ページを開いてみてください。その瞬間、あなたの人生が変わるかも知れません。人と本の出会いは神秘的なものです。無尽蔵の本の中から一冊の本を選ぶのですから。そのようなわくわくした気持ちで岡村文庫を訪ねてください。飾ってあるパネルのなかの岡村が人懐こい笑顔で「よく来たな」といいながら迎えてくれるはずですよ。

### 《本学教員からの寄贈著書》

図書館では、先生方に寄贈していただいた著作を図書館2階自由閲覧室に、「教員著書」として配架しています。先生方の最新の研究成果に触れてみてください。

平成20年2月から平成20年4月までに寄贈していただいた資料は次のとおりです。

◎六鹿 茂夫 先生（国際関係学研究科）

『ルーマニアを知るための60章』六鹿茂夫編著  
明石書店 請求記号 302.391/Mu95

◎剣持 久木 先生（国際関係学部国際言語文化学科）

・『満州—その今日的意味』小林英夫編著  
第二章：満州の経験 剣持久木ほか著  
柘植書房新社 請求記号 222.5/Ko12

・『記憶の中のファシズム—「火の十字団」とフランス現代史—』（講談社選書メチエ）剣持久木著  
講談社 請求記号 312.35/Ke45

\*先生方におかれましては、今後とも著作を発行された際には、図書館へのご寄贈をお願いいたします。

## 《図書館2階 AVライブラリーが 世界の情報窓口としてリニューアル オープン》

県立大学附属図書館では、AVライブラリーに海外衛星放送が視聴できる大型テレビを導入し、世界の情報をいち早く図書館でキャッチできるように整備しました。これを記念して、県立大学開学記念行事が行われた4月25日に、AVライブラリー リニューアル オープニング セレモニーを行いました。

式典では、公立大学法人鈴木雅近理事長、西垣克学長、小幡壮附属図書館長、留学生の唐敏さん（国際関係学研究科1年）、頼盈伶さん（生活健康科学研究科2年）、モニラ・パービンさん（生活健康科学研究科1年）によるテープカットが行われ、学長からは「何が真実か見極める目が、グローバル時代には欠かせない。国際人としての教養を身に付けてほしい」との挨拶がありました。これからも、多くの学生・教職員・留学生のみなさまにAVライブラリーを利用・活用していただきたいと思います。



【オープニング  
セレモニー風景】



### AVライブラリーの改装・整備概要 (目的)

これから国際社会に羽ばたこうとしている学生に、国際感覚を養い学生生活の質(QOL)の向上を図るために、また世界レベルでの調査研究活動を行っている学生・教職員、海外からの留学生のみなさまに、現地の最新情報を提供することを目的に、AVライブラリーを改装・整備しました。

### (整備概要)

- ①書庫のビデオ・DVDをAVライブラリーに配架し直すと共に、明るく、利用しやすい空間に室内を大幅に改装・整備しました。
- ②海外衛星放送を見ることができる大型テレビ(3台)、地上波/衛星波が見られるテレビ(11台)、ビデオデッキ(7台)、ビデオ書架(12台)を配置しました。  
看護実習などの事前準備のために、2人でビデオを見ることができる席も整備しました。
- ③海外衛星、「AsiaSat 2」「AsiaSat 3 S」「Chinasat 6 B」が受信できるパラボナアンテナを3台設置し、世界約30ヶ国の約130チャンネルの海外衛星放送を見ることができます。テレビの音声は、超指向性スピーカーにより、耳元でクリアーに聞くことができます。

#### 【AsiaSat 2】の番組

「RTR Planeta」ロシア(ロシア語)、「RAI International」イタリア(イタリア語)、「TVE Internacional」スペイン(スペイン語)、「Al Jazeera Channel」カタール(アラビア語)など33チャンネルが見られます。

#### 【AsiaSat 3 S】の番組

「DW-TV (Deutsche Welle)」ドイツ(ドイツ語・英語)、「Al Jazeera English」カタール(英語)、「BTV Word」バングラディッシュ(ベンガル語)など42チャンネルが見られます。

#### 【Chinasat 6 B】の番組

「Nei Monggol TV」モンゴル(モンゴル語)、「中国中央電視台」中国(中国語、英語、フランス語、スペイン語)、そのほかに中国各地域の番組52チャンネルが見られます。

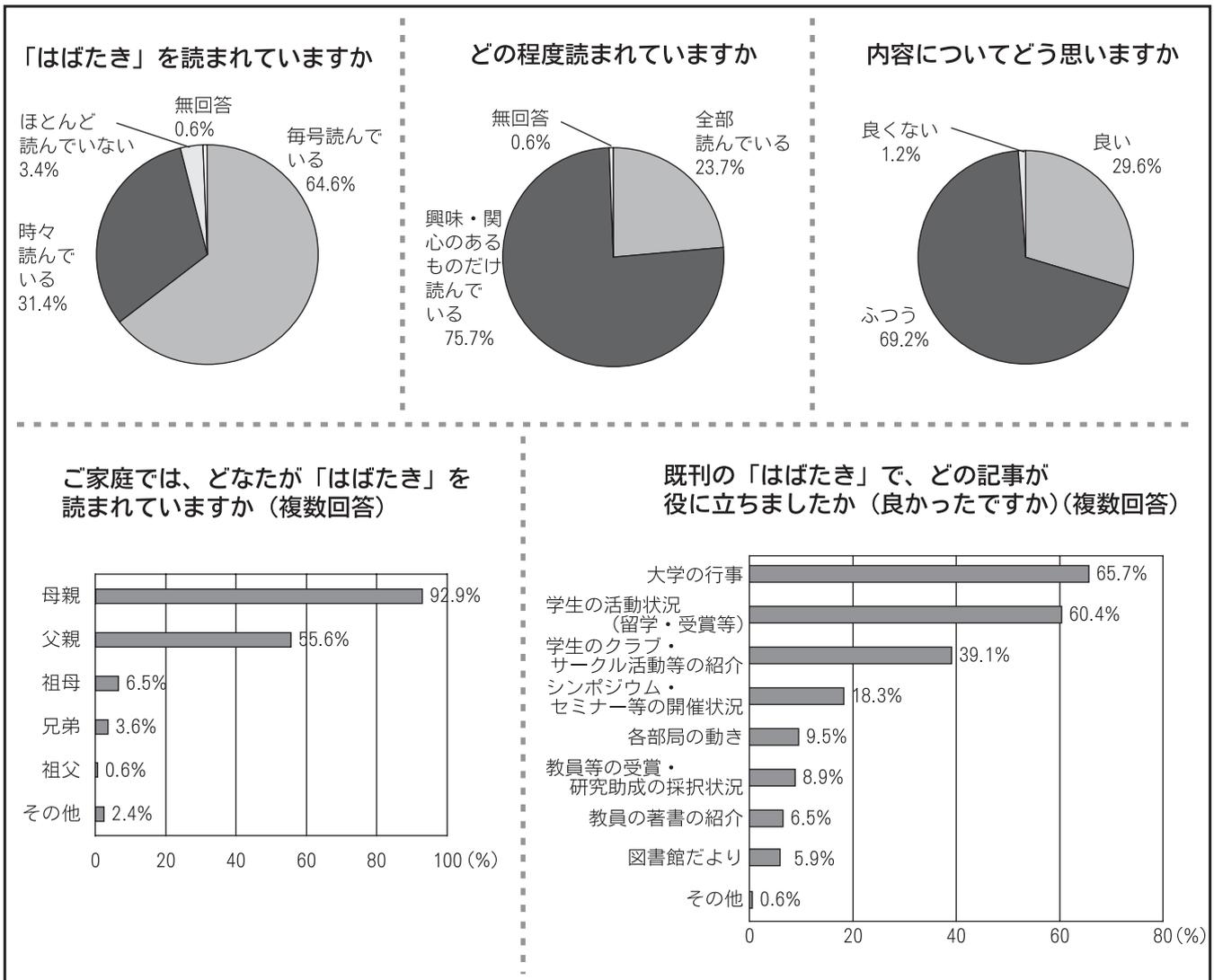


【AVライブラリー室内風景】

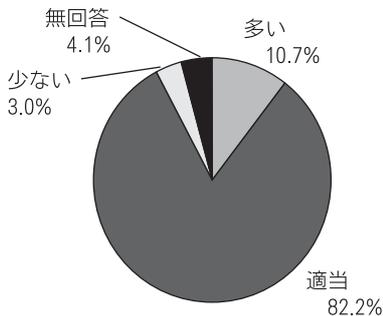
# はばたきアンケート集計結果（抜粋）

平成20年3月に実施した「はばたきアンケート」の集計結果（抜粋）を報告します。  
皆様のご意見等を参考に、次号以降に反映させ改善していきたいと思っておりますので、引き続きご愛読ください。

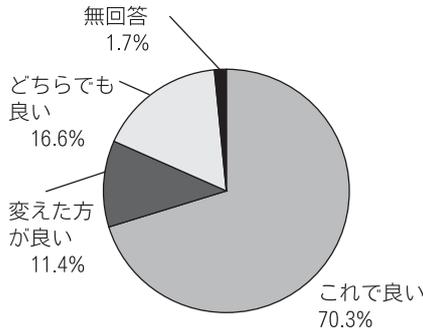
- 調査概要 【調査実施時期】 2008年3月下旬～4月下旬  
 【調査対象】 保護者500人  
 【調査方法】 郵便にて保護者500人に送付、回収。  
 【調査内容】 「はばたき」評価、満足度等  
 【回収数】 175/500（人）



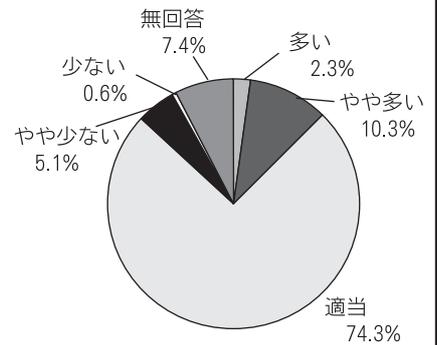
発行頻度（年4回）について



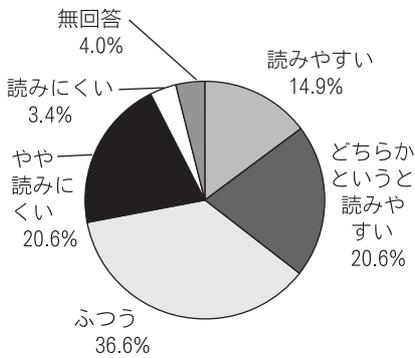
表紙について



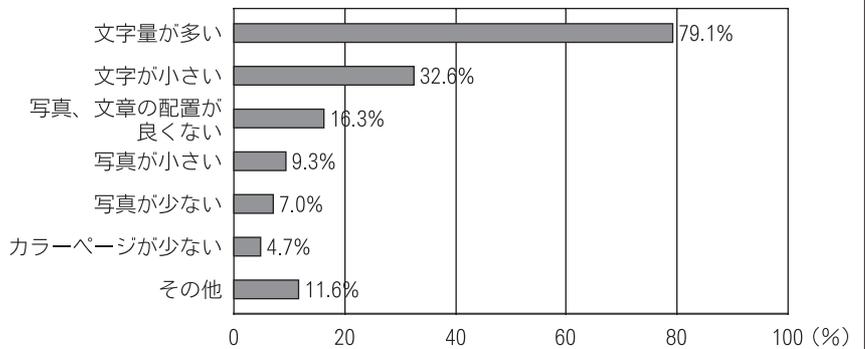
全体のページ数について



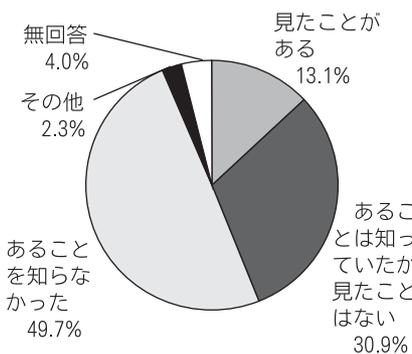
全体の印象について



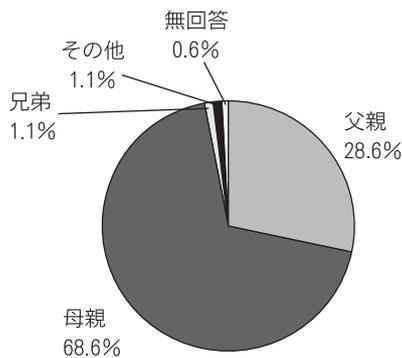
読みにくい理由は？（複数回答 該当者 43名）



ホームページに掲載している「はばたき」について



回答者について



今後取り上げてほしいテーマはありますか

- ・学生の学校での様子、または普段の生活（遠方に住む家族に多い意見）
- ・卒業生のその後（活躍）
- ・進路・就職状況
- ・各学部、研究科の活動内容について詳しく
- ・資格・免許について
- ・クラブ・サークル案内
- ・ゼミ便り
- ・大学の活動報告

その他、意見、感想等

- ・文字が小さいのと各ページのレイアウトがかたすぎる。情報誌なのか研究誌なのか宣伝誌なのかあいまいである。
- ・学校行事とクラブ・サークル活動の写真は記念に残るので大きくしてページ数を増やした方がよい。
- ・学会会議、講演会の内容を盛り込んでいるせいか、やや固苦しい印象があります。もう少し親しみやすいものになれば、なお良いと思います。
- ・多少、静岡県の観光や史跡、企業などの情報を写真なども取り入れて掲載すれば、さらに読むことが楽しくなると思います。
- ・毎回楽しみにしています。（子どもと）離れて暮らしている為、少しでも学校の様子を知るとはとても有難いです。

# SPORTS CONCEPT 平成20年度 開学記念行事開催!! SPITTING

春の恒例行事となった開学記念行事が4月25日(金)に行われました。今年で17回目の開催となります。

第1部は昨年が続いて第5回目となる運動会が開催されました。前日の雨によるグラウンド不良のため、体育館での開催となりましたが、約100人の参加があり、障害物リレー、馬上走、玉入れなどが行われ、まさに“県大生パワーさく裂!!”といった様子で、大変盛り上がりました。



運動会・選手宣誓



運動会・障害物リレー

第2部は「音楽を通して明日への英気を養う」と題して、聖隷クリストファー大学准教授の店村真知子先生たなむらまちこによるピアノ演奏とお話がありました。音楽の心への癒しの効果が実際のピアノ演奏とともに語られ、また、会場の参加者とのディスカッションも行われ、日頃ストレスにさらされている心が癒される大変有意義なひと時でした。



店村真知子先生によるピアノ演奏とお話

第3部の「はばたきのつどい（懇親会）」では、サークル・部活動で大いに活躍した団体に与えられる「おおとり会賞」の表彰式が行われ、大学祭や様々なイベント開催により学生間の交流やサークル活動の活性化等に大きく貢献している「剣祭実行委員会」が学長から表彰状と賞金が授与されました。また、第1部の運動会の表彰が行われ、恒例となった大きなケーキが優勝チームに与えられ、会場は大変盛り上がりしました。続いて学生アトラクションが行われ、ジャズダンス部によるエネルギッシュなダンスや、GOLD ROWDIESによる華やかなチアリーディングが披露され、懇親会は大盛況でした。



おおとり会賞・剣祭実行委員会



懇親会



運動会の優勝チーム



ジャズダンス部



GOLD ROWDIES



## あなたにも救える命があります



みなさんAEDをご存知ですか？

突然の心停止から命を救うための装置です。痙攣を起こした心臓に電気ショックを与え、正常な状態に戻すものです。操作は音声ガイダンスにより指示され、電気ショックが必要かどうかAEDが判断してくれます。2004年7月より医師や救命救急士だけでなく、現場に居合わせた一般市民もAEDが使用できるようになりました。

「突然の心停止」を起こした人の命を救うためには「救命の連鎖」といわれる4つの行動を迅速に行うことが重要です。これは ①迅速な119番 ②迅速な心肺蘇生法 ③迅速な除細動 ④迅速な高度救命処置となります。

突然の心停止を起こした人の生存退院率は、除細動が1分間遅れるたびに約10%の割合で低下します。救命のためにできるだけ早い除細動を行うことが、高い救命率を実現します。



本学では、はばたき棟1階の守衛室横と、体育館入り口、クラブ棟にそれぞれ設置されています。いざという時の為にAEDがどこにあるか知っておく必要があります。又、健康増進室では、今年度も教職員、学生を対象としたAED講習と救急法の講習会を予定しております。みなさまのご参加お待ちしております。

健康支援センター

## 県立大学のホームページをリニューアルしました！

静岡県立大学及び静岡県立大学短期大学部はホームページを平成20年4月にリニューアルしました。

リニューアル後は閲覧者の利便性が向上し、パソコン環境を問わず、また高齢者や視覚障害者の方、外国の方等幅広い層の皆様へ快適にお使いいただけるよう配慮したものになっています。

本学ではwebサイトでの本学に関する情報の積極的配信を推進しており、最新情報は、「ニュース&トピックス」または「イベント」で随時更新していきますので情報提供にご協力下さい。

今後とも皆様が必要とする情報を掲載していきますので、是非アクセスしてみてください。

県立大学 URL : <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

県立大学短期大学部 URL : <http://oshika.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

## 学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお待ちしています。大歓迎します。

教育研究推進部・広報室（はばたき棟3階）宛にお願いします。

E-mail : [koho@u-shizuoka-ken.ac.jp](mailto:koho@u-shizuoka-ken.ac.jp)

企画・編集：静岡県立大学広報委員会（事務局 TEL 054-264-5130）

静岡県立大学ホームページアドレス : <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>